
クラゲと俺とドラゴン先生

真坂 哲也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラゲと俺とドラゴン先生

【Zコード】

Z3632Z

【作者名】

真坂 哲也

【あらすじ】

クラゲと融合してしまったシンは、異世界に来ていた。

ドラゴンに会つたり、モンスターと戦つたりしながら冒険するのです。

文章を書くのが始めてなので、解りにくい所もあると思いますが、よろしくお願いします。

第1話 ドラゴン先生そりゃないよ

俺は大学の研究の為くベニクラゲを採取しに漁船に乗つて海に出てた。

ベニクラゲ、別名「不老不死」のクラゲと言われる、ちなみに5mmくらいの大きさ。

ちょっととした肌の若返りの薬でもできれば、大儲け間違いなしだ！なんて思つて研究課題としたのだ。

ベニクラゲを大量に採取して、帰ろうと思ったときエンジントラブルで潮に流され遭難してしまつ、岸も見えなくなり、かなり沖を漂つた挙句嵐に遭つて光の渦に飲み込まれてしまつたのである。

消え行く意識の中、体の細胞がバラバラになりベニクラゲと融合しながら溶けていった。

そう彼は異次元の世界に、魔法や怪物の住むファンタジーな世界に流れてしまつたのだ。

「痛て〜〜

なんだなんだと考へながら周りを見渡す俺、大きな岩山が見えるが後は天然林みたいだ。

確か海で嵐に……どう見ても森だよな……まあ生きてるしいいが。

田の前の物に田が留まる。

おつ……

あれ??

俺だよな??

しばらく眺める。

「ひいい——俺が死んでる」

田の前には俺の死体があるよ。

ショックで放心状態……30分くらいいたって死んだ俺をそろそろそろり調べる。

つんつん、くんくん、ポコポコー?つむ、変な音だな、これは!—

くく検証結果> <

抜け殻だった……背中の辺りに割れ田があり、中が空っぽだった。

「つまおーー、見てはいけない何かを今見てるぞ……たぶん」

セミの抜け殻みたいに……かなり肉とか付いてるけど……あう!まさか、俺つてセミだったのか、それとも蛇だったのか……しばらく考え……まあいいか、なんとかなるさと笑い。

↙↙結論↙↙

クラゲと融合したのは現実だったと決める。

ベニクラゲは老化現象が始まると、細胞が若返る現象がおきるが……正確には不老不死ではない、死んだら終わりだ……ベニクラゲ普通に魚に食われるし。

ただ老化しないだけだから、たぶん今回は死ななかつただけ運がよかつたのだ。

俺の抜け殻を見ればわかる、生身なら全身打撲で死んでるのは間違いない。

体を見ると傷一つない、気がつかなかつたがかなり若返つてた。

俺の抜け殻から服を取り着る、服がでかすぎだ……がーん、背が縮んでる、20歳から12歳くらいになつてる……まあいいか一人だし。

落ち着いてまわりを見渡すと100m先の岩山の裾辺りに船を発見、船の中に食料や水などもあるはず。

「うやつほい～」

叫びならダッシュする。

10mくらい岩山を駆け登り船を調べる、あるある非常食や水は無事だ、とりあえず助かつたと水を飲みながら、これからどうするか考え、
「俺の抜け殻」の墓を作ることにする。

船の中から掘れそうな物を持つて岩山をさりに登り、眺めの良さ

「 そんな場所に墓を掘る、

「 結構疲れるな……しかしホント不思議だよな～～」
と「俺の抜け殻」を遠くから見る。

「 後は運んで埋めるだ……

「 げえっ、なんだ、ひいい～～」
食べられます。

「 俺の抜け殻」……森から虎や狼らしき化け物が出てがつがつと食べています。

ガクガク震えながら岩と岩の陰に身を隠して眺めている。

「 ドカーン！」

ビックリひいい

ものすじに音が……

背後からドラゴンが現れ「俺の抜け殻」を丸のみ。

「 さよなら～～俺の抜け殻」達者でな～～

声が聞こえたのか? ドラゴンが振り返り、こすりこすりと向かってくる。

やべ～～見つかった。

俺を見つけると田の前で止まり命令された。

「 じぱり～～罪の その間ドラゴンの巣を守れ

そう言い放つと若山にあつた大きな穴のに入つて行くのだった。

「了解であります」

……無理ですが、戦死の覚悟をします。

なんてことだ、いきなり守れつていわれてもなーー正直生きていけるかもわからない。やっぱそうな猛獸いたしな、生き残れるのだろうか?。

サバイバルが始まつた。

船の中を物色する、2㍑のペットボトル10本、非常食約10日分、簡単な料理道具いろいろある。カセットコンロもあるがガスがすぐ尽きるだろ?。操縦席の前には小さな部屋もあり寝泊りできそうだ。

家から背負つてきてたバックパックに着替えやお泊りセットまである。船は小さな漁船だったので三角帆と大きな帆の屋根があり、ロープは沢山ある、屋根は改造して生簀いけすに雨水がたまる様にする。

人がいなか3日間探したが誰もいない……兎などの小動物がいるので狩を始める。

岩山の周りで狩をするが……無理。

「早すぎだぜ、絶対取れないな……そつか罠だな」

落とし穴や怪しい罠を大量に作り、棍棒を振り回しながら兔などを追い回す。たまに運良く罠にかかるのだ。

どうもドラゴンの巣の近くには猛獸いないみたいだ。初日に見たがそれ以外痕跡もない。ウサギの皮を剥ぎ取り肉を取り出す。実際にやると結構つらかったが、すぐになれた。

この毛皮で服でも作るか……とりあえず腰巻なるものを作った。

なかなかしつくりくる、気に入った、これは貴重なコレクションとして大切にしよう。服は大きくなつたら着ようと大切にしました。

サバイバル生活は薬草や食べれる木の実やキノコなどいろいろ知識が増えた。

なぜなら毎日怪しい木の実やキノコを食べ、毒にあたり、腹をくだし、痺れるなど、俺自身で人体実験を繰り返したからだ！－ウハハ。

その時俺は気がつかなかつたが、あらゆる毒に対しての免疫がついていくのだった。さらに軽い怪我や傷は意識すれば、一瞬で治ることがわかつた、きっとクラゲ効果だ。

1月が過ぎる頃には、原始人のような生活になつていた。

「うほつうほつほほほ……」

軽快に走りながら叫ぶ、このウサギの原始人パンツは実にいい出来だ、と言い聞かせながら、出来ればヒョウみたいな毛皮がほしいが、あんなのに出会つたらまず死ぬね。

棍棒片手に近場の森を探索してると、騎士らしき遺体を見つけた。おお！！人がいるのか……一人ではないんだ……人に会えるかも知れない。喜びと、今までの変人な行動を見られたのではないかと焦り辺りの気配をさぐる。

「よし、誰もいないな」

周りに誰もいないのを確認し、遺体から武器や防具など装備品を手に入れた。

「お～～これがロングソードか」

と映画で見た、騎士の真似などしながら素振りをする。

「これで戦えるな、戦いたくないけど、ピンチにはなんとかなるはず」

この日から生活が変わった。

原始人を卒業したのだ。

それは人に会えるかもしない希望。

運がよければ美人な女性なんかに会えるかもしない。

」の妄想が日に日に巨大化して今では

「俺の名はシン、異界より着たり。ドラゴン先生の巣を守る勇者である」

と「万が一」人には出合った時のセリフを考えたりしてゐる。

1月前はドラゴンを見て恐怖に怯えていたが、ドラゴンに（先生）を付ける事で親近感をもたし、恐怖を克服したのだった。

さらに美女と同棲する可能性も考え、倒木を切り家作りや、柵を作る作業に没頭した。

夢のマイホームが出来そうな頃、まー倒木を蔓で結んで作った原始的な家だ、小屋のほうが正しいのか。

「まーこの作業も後数日で終わるな、次はベットだな」

と休憩をしてると背後で「がさがさ」と音がした。

ビック！？

なれた手つきで剣を構え辺りを探る。

「俺の名は……！？」

なんだ犬か……小さな犬であるが、かわいくない

「やるのか、おお

敵を威嚇し俺の縄張りを主張する。

襲つてくるのか、武器を構えてしばらく様子を見るがそうでもない。

ふつ脅かしやがつて……と犬など無視して作業をすすめる。

夕方近くまた「がさがさ」と音がする。

ビック……

剣を構えて待ち受ける。

また犬が現れ今度は、子豚みたいな獲物をくわえてのんきに歩いている。

なんだあれば、うり坊か！？」の周りで見たことがない。

実にうまそうだ、やるしかない。

俺は容赦なく犬に襲いかかりうり坊を略奪する。

「うめ～～～この肉最高だわ」

と大満足しながら食べると、物ほしそうな顔の犬が近くで見てる。

ふと略奪を思い出し、すまなそうに肉を半分投げると、がつがつ食べていた。

「気に入った、よしお前を弟子にしてやる！」

と決めクロと名付けた、真っ黒な犬もどきだからだ。

同じような感じで 猫もどきも現れそいつはシロと名付けた。シロとクロはたまに小物をくわえて現れる。それを奪つて料理し半分を返す、罠で取れた獣がいる時は分けてやつたりした。

いつのまにかクロとシロが家に住み着き3人暮らしになっていた。なんて偉いやつらだ、もう狩などしなくてすむかもなど喜び料理するのだった。

ある日クロとシロをよく見たら、狼と虎系の魔獸だとわかつた。

きつとく俺の抜け殻を食べた、あの猛獸達の子供だらう……考えたら恐ろしかつたが、仲間なら心強いと思い、かわいがる事にした、かわいくないけどね。

「愛があれば、言葉なんていらないさ」

なんて考えながら剣の素振りをしていくと、クロがからかう様にやつてくる。

めちゃめちゃ馬鹿にされてる感じだ、俺様にも我慢の限界があるぞ。

「よからず、稽古をつけてやる。師が弟子を思つのも愛だああ

と言い放ち棒切れをもつて、襲い掛かる。

「こや 勝負」

めひやめひや素早い、棒切れは空をさるばかりだった。

「」の日から毎日の稽古は剣から木刀に変わり、クロやシロと訓練するようになった。

人に会つ「」とも一度も戦う事もなく、半年が過ぎた。

「クロ勝負じや」

叫びながら相手を探る、朝の稽古だ。

こきなり背後でドーナンと音がある。

まさか……いやな予感がする落ち着いて振り返る。

「ドーナン」の巣から、かなり小さくなつたドーナン先生が出てきたのだった。

「おじ小僧、我が名はサンダードラゴン、今より契約を結ぶぞ……
我が名を呼び 契約すると誓え」

こきなり命令される。

「はい先生、ドーナン先生と契約します、お願ひします」

と返事をして怯えまくる、奴隸人生のはじまりか……終わった。

「よし契約はなつた、では森のほうに行き我を召還してみよ 我が名を強く念じ呼び寄せるのだ」

「わかりました」

と叫びダッシュで森の奥に駆け込む、ミスつたら確実に殺される。やられ

「ドラゴン先生にきてください」と強く念じ叫ぶ

「ドラゴン先生 来い！！」

ドガーン バチバチバチ（電気の音）

ドラゴン先生の回りの森が広範囲に吹っ飛び 稲妻が渦巻いている 大きさも初日見たよりでかい

「やつと 力を獲た…… 感謝するぞ小僧」

ドラゴン先生の話では、お前の抜け殻は高濃度の魔力の結晶であり、食べれば1ランク上の力が得られたが、なぜか細胞が若返りだした。

細胞の活性化が止まらずどんどん若返つていぐ、1000年以上生きていたドラゴン先生は役半年ほど若返りの時間が必要だつたらしい。

若返りの原因がお前の魔力を見てわかつたらしく、契約すれば若返りが止まり最高の状態の体になる事も予想できた。

簡単に話せば、60歳の人が若返り過ぎて5~6歳子供になり、そのまま年を取らなくなってしまう。

原因の者と契約すれば若返りが能力のピークの時（20歳くらい）に安定するのだった。いつのまにか、俺の体も18歳くらいに戻つていた。

普通なら召還者はかなり高い能力を必要とするが俺の抜け殻を食べたので、その力がドラゴン先生に宿り、俺と共に鳴してるらしい。

ドラゴン先生と契約はしたが、もちろん命令されるのは俺だ……しかも召還するのに、でかすぎて屋外でないと無理らしく、召還時サンダーブレスなる物を発動するので、もし人や建物があれば吹き飛んでしまうだろう。

ぐだらない事でドラゴン先生を召還したら、激しく怒られ恐ろしくて召還できない事もわかつた。

先生 結局……使えないじゃ……

第一話 ドラゴン先生やつやなこと（後書き）

よろしくお願ひします

第2話 隠れ家

ドラゴン先生の話ではシロとクロも俺の抜け殻を食べていらっしゃ契約できるとの事だ。

俺は、我が弟子なり思つ存分命令できると思つて早速契約をした。

「クロ、シロ。召還」

クロは真つ黒い陽炎のような狼に、シロは真つ白い白虎になつた。

「ほー、影狼に白虎か」

ドラゴン先生の話では、種族最強に近いらしく、普通召還出来る物ではなく、人になつて事もない。危険な魔物の名に入るらしい。

クロは見た目からやっぱそうだが、シロは見た目は堂々とした白虎だイメージ通りだ。

恐ろしいが、とりあえずシロから馴れてこいつのシロの頭を撫でながら。

「クロ シロよろしくな」

と笑顔で挨拶。

「がお～～～う」

シロが胸を張るように抱える。咆哮です……痺れて動けません。

（咆哮とは抱えて相手を威圧し麻痺させるスキルです）

謀反だ、明らかにわざとだろ油断したぜ。

正直、怖すぎて馴れるまで（咆哮とかも合わせて）にかなり時間がかかった。

次は騎乗の練習だ、馬に乗つたこともないのでひたすら練習だ。

最初はゆっくり歩いてもらひなんとか乗れる程度だつたが、今は結構乗りこなせるよくなつた。

クロとシロを引きつれ森を探索するが魔物などさっぱりいない平和な森だ。

騎士の死体があつた場所を重点に探す人に会えるかも知れないからだ。

シロの背中に乗り森を走つてるとクロが突然走り出す。

「きや——」

遠くで女性の悲鳴が聞こえた。

ついに出会いキターとダッシュで現場に向かう。

クロの前に化け物がいる。人型だがまさに狼だ、これが人獣なのか？

おびえてる様だが何かを叫んでる。仲間を読んでるのか……？

「女性を何処にやつた！」

「周りを探るが他に誰もいない……血痕もないから連れ去られたか！？」

剣を構えて人獣を威嚇する、人獣は私の剣を見たとたん力なく座つて何かを言つてるが、さっぱりわからない……シロほえろ！

「がおおおお」

突然の咆哮で氣を失う人獣、船にあつたロープを取り出しグルグル巻きにして逃げない様にし、周りを探索するが足取りがわからぬ、ドラゴン先生のところへ連れて行くしかないか……先生なら言葉がわかるかも知れない。クロが人獣を咥え、先生の所に戻る。

「ドラゴン先生……大変だああ～～
とあわてて走り込む……ハアハア

「女性がさらわれた、早く助けなければ……」
早口に状況を話す……大切な出会いなんだと真剣に。

めんべくもそうに振り返るドラゴン先生。

「言葉か、忘れておつたの？……ま～～あわてるでない。その女を起こせ」

女つて……周りを見ながら人獣の事だとわかる、焦る俺……まさか勘違いかー？

ドラゴン先生が呪文を唱えてる、通訳の呪文らしい。

人獣を起こすと、ドラゴンを見て泣き叫けぶ。

「食べないでください。何でもしますから命だけは……」

「これで良からう、シン後は人狼と外で話せ」

言葉を理解した俺を確認し、弱みを握った様にニヤリと笑う。外に連れ出し人狼と話す。

「お前な〜〜人狼つてのは、もつと、かわいらしくだな、耳がピコつてついて、もっと愛着が沸くものなんだよ。胸もでかくてだな。スタイルもよく、ぶつぶつぶつ……あああなんて事だ」

勝手に理想を話落ち込む俺……ああ君が悪いわけではないよ、判つてるこの世界に少し絶望したのだよ。

「もう家に帰つていよ、君は自由だ！！」

かなり凹てる様で顔も見てない、そんな俺に切羽詰った用に話かけてくる。

「あの仲間が死にそうなんです、お願ひします。助けてください

「どんな化け物に捕まつたのだ？」
やる気ねーオーラがでまくりだ。

「化け物ではなく、病気なんです」

「はい！？何人くらいだ」

「20人ほど、急がなければ死んでしまいます。何でもしますので」

「分かった、助けよう。しかし君の命は今日から私がもらおうとい
か？、君の名前は」

「わかりました、私の名前はサラです」

見た感じ彼女はかなり強そうだ俺にはわかる、よく見ればワイル
ドな顔が怖すぎるぜ。恩を売れる時に売つとけ、この森で生き抜く
為には護衛ながまがいなくてはな、最高の右腕になつてくれるだろ？。

「俺はシンだ、一つ聞くが俺が行つたら間違えて食べられる、なん
てないよな？」

「大丈夫です、動ける人はほとんどいませんし皆、女性です。ちゃ
んとピコつて耳がついてる人もいますよ」

「なんだつて～、ゲフン、そつか、そつなんだ。サラは、戦闘系
なのか？」

やつぱいるんだ、出会いだ出会い、よかつたぜ。

「私はまだ生まれて若いのでランクが低いのです、上がればピコつ
て耳になりますよ、戦闘は弱いですが……戦闘系つてなんですか？」

サラにピコ言われてもまったく創造できないのだが。

「なんだって……戦闘できないのか……まあいい。ピロには何年かかるのだ？」

「周りの話しへは早くて10年とか平均30年かな？」

聞いた俺が馬鹿だった、その頃は死んでるさ。コックとして生きてもらうか、飯しだいか不器用そうだがまあ後で考えよつ。

「ドラゴン先生に話していく、そこの家に薬草があるので準備してくれ」

俺はドラゴン先生に助けに行くと話すと、この奥に水が沸いてるから、その水とく先生の抜け殻>があるのでその肉を持つていけど……先生も脱皮したんですね……共鳴シンクロしたつてこれですね。俺も化け物になつたと思ったよ、分かる分かるよ。しかもく抜け殻>、邪魔なのでくれるらしい。

ドラゴン先生の寝床から少し奥に行くとかなり広い空間があり冷える、冷蔵庫の中に入っているようだ。

この部屋は半人口的で天井や壁の上部の隙間から光が入つていて。広間の奥に大きな岩がありそこから水が湧き流れ出している、岩を伝い流れた水は水路にあつまり大小の水溜りを作り壁の奥に流れて行く様だった。

この広間に先生の抜け殻もある……生きてるようで恐ろしいが剣で内側から肉を少しそぎ取り、不思議な水もペットボトルに入れる、たぶん何かの効果があるのだと見た感じから怪しい、回復だらうな2Lのペットボトル2本と肉3キロくらいをマストの帆だった布にくるみバックパックに詰め込む。

クロにサラを乗せ俺はシロにのる。

大体の場所を聞いて出発する、東側の岩山に沿つて森の中を2時間近く走ると、見上げるばかりの断崖絶壁がある、そこらしい。近くまでても何処にあるか分からなかつたが、サラが指差す場所に小さな洞穴がある。

「あれが隠れ家です」

入り口の近くに来ても人の気配がない、武器を手に警戒しながら中に入り周りを見渡す……絶句。

全員死にかけてます・・・獣人？やら見たことない人種？がいた。バックパックからペットボトルを取り出し、重症な人から少しづつ水を飲ませる。かなり楽になるのかうめき声などはなくなつた、表情も落ち着いてきている。

よく見たらサラも苦しそうだ、水を飲まして。

「お前も寝ていろ」

薬草を探しにいく、胃腸薬系だ。思ったより重症だ、病人にいきなり強い薬は逆効果と昔本で読んだことがあるからだ。適当に薬草を取り戻り台所らしきところでドラゴンの肉をミンチにしてさらにつぶす。

これなら飲めるだろ？……残つてた水との2㍑の水に薬草を入れ、肉を小さじ半分くらい口に入れ水を飲ます。

全員の食事が終わる頃には暗くなつていた。顔色も良くなつてゐただから安心して、あまつた水と肉を置き。シロに洞窟を守つ

ても「うじ」としてドラゴンの巣に戻ることにした。

クロに乗つて戻る、帰りは飛ばして1時間で着いた、今日の事を先生に話す。

「つむ上出来じや、あの人獸を見れば病だとはわかつたが、そこまで酷かつたのか、死臭もしてたしのう」

先生の話だと、普通ドラゴンの肉は鮮度が落ちない、栄養満点のめちゃうまい肉だが、この抜け殻の肉は特別らしい。先生が調べて分かつたのは、俺の抜け殻効果によく似てる。高濃度の魔力、能力UP、若返りや寿命効果、怪我や万病にも効果絶大。

先生も気が付かなかつたもう一つ特別な効果がある。

それは、惚れ薬だ。

5～6種類の薬草と混ぜ合わせると回復効果が上がるらしいので明日取つて行くことにして準備する。

持つていくを取り水を10㍑用意、ついでに俺たちの食事もドラゴンの肉と決めたので肉15kgくらいにした、シロとクロが大量に食べるから。

明け方から森に出て薬草を取り昼前には隠れ家についた。中から話し声が聞こえる。

「失礼しまーす」

中に入つて超びつくる、座つて話してゐる中には歩いてる人も。

「「「あつ シン様 ありがとひざれこまか」」」

全員感謝や尊敬の眼差しで深々と頭を下げる。

「ああ良かつた、大分元気になりましたね。昼飯の材料持つてきたから皆で食べよつ

す」」い回復に思わず胸をなでおろす。

少し照れながら逃げるよつて台所に向かつ、感謝されるのに慣れてなくはすかしいのだ。

台所に行くと絶句……

めちやめちや美人な女性が出てきた……

「あ、シン様おはよつじあこます」

「お、おはよつじあこます」

ペコリと頭を下げる俺

「あ、緊張しなくてこことあよ、カワですか」

「えええ~~~~~」

サラの話では、夜、体に変化があり能力がかなり上昇しランクアップしたらしい。めちゃかわいい……シルバーの髪に白い肌・三角の耳が頭のピコッて付いてる、いやーーもう、縛つたりしてすいませんでした、神様に謝る。

サラに昨日の話を聞くと、昨夜遅くには容体がよくなつたので、もう一度全員に軽く夜食を与え朝症状の重い人を優先に食べれるだけ与え残りを皆で当分で分けて食べらしい。

バツクバツクから水を取り出し、泥棒袋の様にかついでた布袋からドラゴンの肉を取り出し適当な大きさに切り薬草をすり込む。ミンチにしようと思つてたがすっかり食欲も回復してるみたいだから、飲み込みやすい大きさに切ることにした。味見したらめちゃ美味いシロとクロにもお福わけして、あまつたら山分けだぞつと約束する。

「よしやー飯できた 腹一杯食べてくれ」

皆の所へ持つていいく……食べる食べる、あの病人だつたよね？ 15kgが見事になくなりました。

人獸達すげー！！

「シン様、お話があります」

サラは意を決した様な顔で話しかけてきた。

サラの話では1年前、帝国がドラゴン討伐の為 大規模な兵をしてこの森に進軍した。

結果は散々たる敗北で軍は尻尾を巻いて逃げたらしい。ドラゴン

討伐の為、多くの奴隸が借り出され、その中にサラ達もいたのだ。
男達は前線に借り出され、戦えない女や老人などは食料や資材を運ぶ役目に回された。

サラ達が前線のキャンプに着いた時ドラゴンの襲撃に出会い、勇敢に戦つた者は全滅し貴族や將軍達は皆我先に逃げ出してしまった。残された奴隸たちは何とか助け合い戦場を逃れそれぞの故郷や主人の元に帰つていき、帰りたくない者や怪我をして動けない者だけが残つたらしい……。

そして、今の隠れ家を見つけ、ドラゴンから隠れる様に暮らしていたが、数日前から原因不明の病にかかりあつと言つ間に全員感染してしまつたのだ。今回シン様に助けられ皆覚悟を決めたらしい、脱走兵として国に突き出せばそれなりの褒美が出るし、ドラゴンの生贊として出してもかまわないと。

そんな事しないから、大丈夫ですと話すが信じてくれない……結局こちらの身の上話もした。難しい所は記憶喪失つて事で、ドラゴンの巣を守つている事や帝国の人間ではない事。

「では その剣は？」

拾つた……この剣が帝国の騎士の紋章があり帝国の人間だと思われたみたいだ。それならシン様の奴隸になると語つて皆さん聞かない。サラはいい、その他はだめだ！！

「ドラゴン先生に聞いて許しが出たらいいよ」と話その場は去つた、先生も嫌がるはずだ間違いない！！

家に帰つて、早速先生に聞くと

「お前の奴隸だろ、好きにしりと
つてマジですか！？」

困った、俺は見たのだ。たしかにピコッとしていた、しかしあつ、
おばあちゃん、いや老婆だ。考えて見てくれ、ガリガリに痩せて病
氣の老婆が生の肉にくらべつづく姿を……背中に冷たい汗が流れる。

H口レベルで話すと、俺の最大でも熟女までた。これでもかなり
厳しいのだが、あれは完熟を通り越して干しブトウ？いや干婆だな
……しつけの厳しいご老人達が、俺とサラの愛の生活に邪魔をする
はずだ。

黙つて見てるはずがない……。こんなジャングルで礼儀やしつけな
んて真つ平だ。

鼻がよく効くやつらの前で臭い屁を出すのは聞きたうだな。まず
はこれで行くか。

断る言い訳を100個ほど考え俺は寝た。

第2話 隠れ家（後書き）

おひじくお願ひします

第3話 引越し

朝起きて気が重いが獣人達の隠れ家に向かつ。

住民は人狼とドワーフがほとんどで、後シャドウつてのが1人いた。

人狼は、老人でも人間の何倍も力があるので、荷物運びとして連れてこられたみたいだ。

ドワーフの人達は主に武器や防具の修理、薬草の採取やコックをさせられていたらしい。

シャドウは隠密部隊なのか分からぬが誰もよく分かつてなかつた。ただ怪我がひどく動けない状態だった所を助けられたらしい、今もほとんど動けない。見た目は髪が黒く肌も黒い目と口だけが赤かつた。

妖艶だが危険な香りがする、怪しそうです、ステラさん。

「どうやつて断るうか……」

洞窟の風上で……ふううと少し屁を出しその毒ガスを素早くつかみ鼻でゴブシを開く、にぎり屁だ。うお、臭い……マジくせーー、今日は過去最強クラスだ、威力抜群だ。風上だから人狼達はすぐ気がつくだろう。

音もしない……あれだ特攻するしかないな、武田信玄の風林火山で行こう。

風の様に入つて、林の様に毒ガスをまく、奥地についた頃には、火の様にガスが鼻を襲う。敵意の視線が俺に向かうが山の様に受け止め、君達は自由だ俺は俺の道を行くと不適に笑い残りのガスを出しながらさつて行く。

最後にサラお前は別だと抱き寄せ消える。やつてやるぜーー！

風の様に素早く隠れ家に入る……てくてく

「おはよう

「「「おはようござります」」」

うむ、やはり気が付いていたか、俺は挨拶しながらスカシ屁を垂れ流す……食らえ毒ガスを……ウハハハ

……反応少ないな……グエなんだこれは

くく数分後の診断結果>>

はつきり言つてこの狭く薄暗い隠れ家は汚なすぎた、自然の洞穴に手をくわえただけなので、ゴミや食事の食べカスが見えない場所に溜まり悪臭をはなつてゐるし、隠れて生活してたから皆汚いこれじやー病氣にもなるよ……ここに住むなら10cmは綺麗な土を入れ換気扇とかつけたいくらいだ。昨日はマジあせつたからそこまで気が付かなかつたが、酷かつた。

入り口近くにいた人狼が話し出す。

「流石です、ご主人様。もうこの辺りの縄張りに臭いを付けてきた

のですか！」

なんだつて……！お前ら犬……そつかありそだ……ミスつた。チラリと周りを見ると老婆達はくんくんして、流石だ……とか。この臭いなら、大なら数日は持つ縄張りも半端い広さだろとか、小物など立ち寄る事もしないだろ。いろいろ、ヒソヒソ話し尊敬の眼差しで見る。やばい、作戦変更だ。

出鼻を挫かれたぜ、作戦の9割が台無しだ。脳ミソでくく緊急事態発生>>ってサイレンがガンガン響く、最終手段をするしかない。発狂して、奴隸はムチでシバクふりをするしかない。俺は力バンから昨夜作つた、怪しいムチを取り出し、不適に笑う。く注、そんな趣味は無いです>。

狂人と思わせるしかない。腹に覚悟を決め、雄たけびをあげる

「つおおお～～～」

地味に雄叫びは気持ち良かつた。腹の底から叫んだ事は今まで無かつた。実に爽快だ……

「おらあおらあ、うひゃ～ほい」

バチバチ地面を叩きながら威嚇する、顔を歪め慌てて逃げ出す老婆、ひい～と避けようとする老婆の動きはまさに妖怪、さつきまで動けなさそうだったのになんて素早い動きだ、火事場のクソ力か？ミッショーン成功……すべての人をたたき出す。む……一人いるステラだ。見るからに汚れてる。

俺はステラに向かつた。シャドウがどんな生き物か知らないから、

この際観察しようと決めた、動けないのか、俺は人形の様なステラの服を脱がす、酷い傷が何箇所も見える。包帯を取つてみると傷が少し化膿してそうだ、ロボットの修理の様にマッパにしながら観察する、いや服から危険な武器が服から続々でてくる。動けないからいいが動けたら、俺は即死だとわかった。

皮膚の中も武器が無いか警戒しながら、全身を指でつんつんする、安全確認だ。危険が無いと知つてとりあえずドラゴン先生の肉と薬草で作った薬を傷口にぬる。異常なし、どうも腱が切れてるぽい、あと酷い火傷だ。外傷は傷が少し化膿してるとたいだ。

ステラも安心したらしい、緊張が緩んでる。酷い傷には、綺麗な布を巻いて、見た目は傷が見えない様に巻き、今だと思い、カバンから俺とオソロのウサギ皮セット、女性用上下ビキニー、を取り出し体に付ける。通気性、心地よさ完璧の物だ。美しい。脱がした服は洗つて武器を取り好みの改造をして渡そつ。

しばらくゆつくり眺めて、腹減つてるか?と聞く、静かにうなずく。言葉は分かるらしい、ふとバンパイア系かもと警戒して口を開かせる、歯に牙は無いようだが、なにがある、しかし口が少ししか平かない……顔の全体を両手でなでなでしてると、注、顔も火傷で酷い、手になにか引っかかる。よく見ると左右の耳の下近くに小さなトゲが刺さつてる。

ゆつくりそれを左右抜き取る、なんだこれは小さな釘みたいだ、サラは口を大きく空ける動作をしてる。

まさか、サラの口を見るなんか刺さつてる、「指をかまないでね」と祈りながら、指を突つ込みすべて取り除く……痛かっただろう。

黙つてうなずくステラ、ドリクソンの肉を満足いくまで食べさせる、こいつは老婆達の魔よけになる、しばらく面倒見るか……腹は決まつた。

俺は覚悟を決めた、サラとステラ一緒に住む、老婆たちは老婆の村を作つてもらえばいいのだ。サラを探しながら住民に話す。

「先生も俺の部下ならいいいといつて」

老婆達は喜んだ。まず動けないって思った体が、シン様の雄叫びで甦つたと。失敗だつた老婆に雄叫びは狼の号令、群をまとめる声と、勘違いし動けるのになぜ動かないのかと怒られたと思ってる。

本能が働き動く自分達に驚き、俺よりも素早い移動で荷物を整理して出発の準備をしだす、シン様は不安だつたステラを裸にして武器を取り上げ、口の中の暗鬼までチェックして私たちの安全を確保した。

なんか目がやばいキラキラ輝いて、ハツキリ話す俺はサラにぞつこんだ。なんか人獣つて一夫多妻なのか……なんか全然気にしてないぞ！！

ほとんどの人がすでに元気になつていいので出発することにした。

クロの背中に俺とステラが乗り、俺がステラを抱きしめながら、シロには重そうな荷物を運んでもらつた。ステラは眠つていて起きても話さないし動かない。寝息でなんとなく分かつた。

「サラ、この辺りは魔物はでないのか？」

「ええ、ドラゴンの巣の周りはめったに魔物は出ませんよ」

「巣の周りってかなり離れてるけど……どうのくまで…？」

「ここは歩いて半日ですが さうね3日くらいこの距離ならほとんど出ないですよ、ドラゴンの巣の近くには魔物は近づかないのよ、だから私達もここに隠れてたんだよ」

「そっか～～それで出会わなかつたのか」

「ドラゴンの巣の周りで暮らせるのは安全を保障されたようなものなの、シン様は巣を守つてゐつて話すけど守られていたのかもよ」
って笑う、やつぱりかわいいよサラは、美を感じた。

「そうなのか～～

「うなずく、他にもいろいろあり 最初はそれでもたまに魔物を見たが、戦で怒つたドラゴンが近くの魔物を狩だし逃げ出したらしい……それに最近はこの辺りの魔獸が統率されたようになり巣に近づく魔物を食べてるとか……

実はこれは もともと魔獸の巨狼などのボスであったクロやシロ（ヒツチは巨虎）が繩張りを守らせていた、しかもクロやシロの抜け殻を食べてめちゃめちゃ強くなつていた。

逆にサラとかはかなり危険があつたが、シンの人会いたつて思いを知つてか危険を感じない限り襲わないようになつてた。

獣人の中にはシロやクロと会話できる人もいるらしいこんな話を後日聞くことになる。

夕方前には家に着き、夢のマイホームに（実は小さな小屋2部屋あるが1つは倉庫になっている）ステラを寝かせたほとんど動けないので……

悪い菌がついてたらいけないと思い、あの不思議な水で皆さん綺麗に体を洗つてもらうことにした。ドラゴン先生に聞くと不思議な水は枯れる事はないから好きに使っていいと。しかしどラゴンの巣に入つて良いのは俺だけと言られた。他の人が来るのはうるさいでけして入れてはいけないと……

船にあつたバケツ大小など（5個ある）を持つて次々と外に水を運ぶ……重労働だ……見かねて先生は今回はサラだけ入つていいことになった、前も一度入つてるし。

体を洗うつてのも風呂などないので布で体を拭くのだ。ドラゴンの巣を汚してもいけないので最初にサラの体を洗うこととした。

スケベ心丸出しで

「サラ背中をふいてあげるよ」

といいながらタオルをしぼる、ポツと赤くなりながら、うなづくサラ、素敵だ。

「シン様、お願ひします」

恥ずかしそうに背中を向け服を脱ぐサラ、背中には鞭で打たれた古傷が痛々しく残ってる、背中をやさしく擦ると……あれ？？何か変。

ペロつて皮がむける、日焼けして皮がむける感じだ少し厚めだ。

「痛くない？」

「大丈夫ですよ」

不思議そうに皮をむいていく、おおお、下から出でてくる皮膚は真っ白でしかも鞭などで叩かれた昔の傷後が無くなってる。

「サラ傷が治つてるよ
わかつてない……」

「だから背中の古傷がなくなってるんだ」

ペロリと皮を見せる……顔を真っ赤にしながら手で覆う、背中の傷より皮が気になつたみたいだ。丁寧に背中を洗いタオルを渡す。

「俺新しい水汲んでくるから、ゆっくり洗つて」

嫌われたかな、ここは紳士にしよう。

サラを見ないよう汚れた水を捨てに行く。新しい水を汲んでは皆の所に持つていき、汚れた水を捨て汲みに行く、歓声が湧いていく。

一段落ついて皆を見れば……

ピチピチの女性が……ありえん。

元、老婆達が調子に乗つて。

「うふ～ん あはあ～ん

てお色気ポーズしてる、絶対だまされんぞ。

しかし凄い見た目100歳くらいが20歳くらいに若返ってる。

ドワーフの人達は若返つても、色気など。

絶句……

神様、幼女がいます大量に……

良く見るためちゃ好みの女性とまったく興味ない人がいる半々くらいだ。どこも悪くないし整ってるんだが……あれだ、スバリ美しい、好みの問題なのかな？まあ、サラがいればいいのだよ俺は。ドワーフ美人って言うのかな？人獸もそうだけど……美しくないのに同族から絶賛されてる不思議だ。

妖怪と呼ぶしかないなあれば……とりわけ美人とされるのは「ブー長」と心で呼ばう一番不細工だ。

しかしあれだく抜け殻の肉>やばいな、俺は味見くらいしか食べずに良かつたと思った……これ以上若返つてたら。

俺や先生は抜け殻だつたけど彼女たちは、皮がむけたのか……軽い脱皮だな彼女達も仲間入りなのか。うむ、納得いかねー、まあいつか前より100倍ました。

そんなことを考えてたらシロとクロが獸を咥えて返つてきた、丸々太った豚もどきだ。皆、大喜びで夕食の準備が始まり宴になつた。

食事の準備をしている時俺は小屋に戻り、ステラの体を拭くことにした。酷い傷が治るのではないか確かめると、今まで一緒に生活してたとしてもお荷物であったのは間違いない、しかも仲間の種族はないのだ。

心の傷もかなり深いはずだ、同じ隠れ家にいれば気を使って世話を話もするだろうが今彼らの部屋は大地で屋根が空なのだ、これからは辛くなるかもしない、俺の家に来たのだ俺が面倒を診よう。

昔を思い出す、キャンプに行くと開放感がある、あれはいつも四角い部屋で過ごしベットで寝る生活が、キャンプではテントが部屋でなくベットだつたなあ～。

ステラに挨拶をして体を洗うぞと話す。

「いや……恥ずかしい」

「そんな年でもないたら……昼も見たし

ぶつぶついいながらやさしく服を脱がす。

痛々しい火傷が見える……

治る様に祈りながら、やせしく体を洗う。

ペロリと皮膚がむける、かなり良くなってるがまだ火傷の後は酷い……皮膚が萎縮してるのだリハビリが必要だ。

「皮がはげてるけど痛くないかい？」

「はい」

「ゆっくり丁寧に洗いながら話しかける。

ステラはびっくりしながら見てくる。

「シン様は回復魔法をつかっているのか？」

「魔法？いや」

ドライゴン先生の肉の効果と話す。

「しかし今やっているのは回復魔法だ、見たこともない方法だが……上級者でもこれはできまい、しかも詠唱もしないでなさるとは」

えええ？？

「魔法とか知らないのですが……どんなものですか？」

「なんと……」

しばらく黙つてたが話しう出す。

「記憶喪失でしたね……きっとどこかの国のある人でございますよ……魔法はですね」

一呼吸おいて話しう出す。ステラが知る最上級の魔法理論、使う人はいなくおそらくそろそろであろう魔法の最先端技術だ。こっちでは重力を説明するのに似てる、知つてると上手く説明しにくい。

「簡単に説明しますと、心でイメージし魔力を込めて再現する、呪

文とか詠唱はイメージを強化し威力や発動率を上げるものです

「はあ～～」

せつぱり解らない。

「回復魔法は普通、自己回復のスピードを上げるのです、上級者は他人に自分の魔力や生命力を注ぎ回復をはやめる……魔力などを注ぎ込むイメージを持つのです。シン様が今使つてたのは、シン様のイメージで私の体を修復させる。細胞一つ一つに命令してる感じです。大げさに言えば手を無くした人の細胞に手を作れと命令し再現させようとしている」

「そうなんですか」

良く解つてない……しかし直るイメージがあつた、サラの皮を剥いだ後を見たときから、もしかしたらと。

綺麗な元の状態をイメージしながら体を拭いた、魔法なのか？？肉のおかげと思うのだが。どちらでもかまわない回復してくれればうれしいのだから。ステラの体を丁寧に洗い、ドラゴンの肉と不思議な水の食事をして小屋の外に連れ出す。

「シン様～～ご飯ができましたよ～～」

声が聞こえるステラを小屋のそばの椅子に座らして

「飯たべてくる」

と断り晩飯を食べに走る。

皆の浮かれたバカ話を聞きながらステラは静かに笑った。

シンの暖かい魔力で包まれたステラは思った、あの暴れまわったドラゴンがおとなしくなつてのもシンの力だ、もう死にたいなんて思つたらいけないな。なんとしても回復しなければ、セリアは体で解つてた、今までにない生命力にあふれてる、そして回復してるので希望を持ち、暖かいシンに感謝した。

夜結局、俺とステラで寝る事となつた。俺の家にはベットが1つしかないので、サラとは明日以降だな。

明日は隣の部屋を掃除してベットをもう1つ作つて。ステラの部屋にするか……明日は忙しくなるな。そつだ、ウサギの皮でもう1セツト、サラ専用のスペシャル水着セツトを作り。1つセ1つと作業開始する。

「シン様何をなさつてゐるの?」

ステラが聞いてくる、楽しそうに何かを作つてるので気になつたらしい。

「ああ～～これ、ウシシ。男のロマンだよ、ステラその服になんか改良点ある?」

よく見るとウサギの皮だ、あきれて話す氣も起こらず寝たふりをする、ステラ。

大体型を作つたので寝ることにする、もひりんステラに手は出さない。疲れてたから熟睡だつた。

第3話 引越し（後書き）

おひじくお願ひします。

第4話 村作り

大変だ~~~~~

とんでもないことが起きた。サラが10歳くらいに若返ってた。

最初は分からなかつた、あれ変な子供がいる。

「お嬢ちゃん、どこから来たんだい？」

「シン様、サラですよ、またランクアップしました、うれしいです」

うれしそうに騒ぐサラ 確かに前よりも美しくなつたが、だめなのだよ、それでは、放心状態の俺……終わつた、あと5年、がんばつても3年はかかるだろ？

俺は口ひではないのだよサラ、俺の愛から逃れて喜んでるのだね。

サラよ、すまないが心の旅に出るよ、どうしたのお兄ちゃん……男にはロマンを求める熱い心があるのだよ……妄想の世界に入る俺。ああなんて青い空なんだ。

俺の世界をぶち壊す妖怪軍団がやってきた。

「シン様あん~、ご飯よ」

おのれ妖怪軍団め！貴様らの呪いかこれは……明らかに声が怪しいぞ、その手には乗らん。

ひそひそ話が聞こえる。

「きつと恥ずかしいのよ」

「初心だね、照れてるのよ」

「もつすぐ我慢できなくなるわ」

キヤー キヤー 言つて朝から騒いでる……やつらから俺の童帝サンクチュアリを守るつてみせるぞ。

そんなところで人獣達の家を作ることになった。

家を作るのに大変なのは木の乾燥である、生の木は重くてもないのだ。しかしドラゴン召還で大量の倒木が出来ていた。後まあ、俺は皮むき間伐つてのを大量にやつてたから、皮むき間伐とは杉や桧の皮を木を切らずにそのままベリベリと剥はいでしまう。すると立木のまま木は枯れ一年もすると木が乾燥した状態になるのだ。

皮は並べて道を作つたり、小屋の屋根に乗せたりしてた。そいや、一人で家作れるのかつて思うが重い木等は船にあつた三角マストの滑車を使つたり、てこの原理で持ち上げたりした、だからドラゴンの巣の近くの大木の真横に小屋が出来た様になる。

この大木にも見張り台を作つてゐるが、ただ眺めのよい休憩所ひなんじょになつてた。

まあ人獣達の家のほうは勝手に作られていく若返つた人獣達が木を切り運んでくる。ドワーフ達が器用に木を加工していくのだ、本格的な家が作られていくのだいやーー凄い、パワーが違うのだ。

今の俺の心の支えはステラになつた。

夕方、ステラの体を洗う又ペロリと剥げる。

結構快感だな、化粧の顔パックを剥がすのに似てる、中から美しい肌が出てくるのだ。この日はさらに回復して火傷の痕がほとんど消えて酷い場所くらいになつた。元々綺麗な顔立ちだったが、傷が治ると、やはり美しい。ゆっくりなら歩く事もできる。

「後2日もしたら火傷の痕はきえそうだ」

今日も同じ様にドラゴンの肉と不思議な水を食べさせ外にでる。

食事の準備をしているので手伝つことにした、火をつけようとカセットコンロを持ってくる。俺はカセットコンロを大きなライター代わりに使いガスを節約してるのだ。

割り箸くらいの木の枝を用意して先を割つて乾燥した草などをはさみ火をつけたらすぐ消す。

効率が良かつたのは松脂で松の木の根元などに樹液がついてる、それを枝につけて置くとなかなか消えない、また豚もどきなどのから取れる油も使つた、薪の節約にもなるし、ただ黒い 스스が出るので焼肉などでは使わない。

ま〜〜そのカセットコンロが彼女らから見れば不思議なアイテムなのだ。古代の遺産とか神のアイテムだとかいだす……面倒なのでガスを抜いて渡した、ドワーフ達は不思議そうにずっと眺めていた。

晩飯を食べ終えるとドラゴン先生の所に話をしにいく、結構疑問なことが多すぎるのだ。

抜け殻の事や魔法の事などだ……抜け殻については先生も興味があるらしく話にのつてくれた。ドラゴン先生やクロやシロは魔力が高いので抜け殻もかなり魔力や効果があるが、隠れ家のの人達の皮はほとんど効果はないらしい、俺は思った、きっと妖怪の呪いだ。

言葉について聞くと、先生が俺の抜け殻を食べた時、俺の意識（人格や知識）も先生に入つたらしく、日本語が話せるようになったらしい、昔のままなら丸呑みしてたと……ひいい。

そしてあの契約がお互いの、意識を強く結びつけるものであると、

「シン今日本語で話してると思つてるが」「ひらの言葉だ」

「えええ～～？」

「最初に一度通訳の魔法をしただろ、あれは一日も持たないものだよ」

びつくりする俺、

「シンの中にある私の知識を引っ張り出した、思い出させたが正しいか」

忘れてた記憶を思い出すよつてそのきっかけを作くり後は自然に話せたらしい。

気がつかなかつた……

だから魔法が使えてもおかしくないし、この若返りの力はシンに

共鳴するから（ドラゴンの若返りが20台になつたよつて）魔力を注げば回復は脅威的になると。それに契約の時、召還と言つたが厳密には、違つたらしい召還は異世界の生物などを呼び出すが、同じ世界にいるのを呼ぶのは、転移魔法らしい。シンは異世界から着てるから召還もできるだが……まあ今は力が無さ過ぎるまだまだ、修行せんとな……この転移魔法も普通ならかなり上級者がやつと使えるのだが、共鳴つてやつらしい。

簡単な魔法も教えてもらつた。ファイアやアイスだ、あとサンダーハー。

サンダーは使える者がほとんどないらしいが使えるはずだと、先生サンダードラゴンですものね。

翌日、朝から魔法の練習だ。

「ファイア」

……無理、朝から百回以上唱えてるが何もおきない。

「シン様 お食い飯ですよ」

サラが呼んでる、

「はい、すぐ行く～」

いや～～かわいい、食べててしまいたい、いかんいかん。

「飯を食べ、小屋に行くステラに会つたためだ。

魔力がわからないので、試してみるのだ。

回復魔法なら出来ているみたいだからそれを使いながら魔力を知る為だ。

もちろんステラの回復の為でもある。

「ステラ、魔力の使い方がわからないんだ」

「そうですか……最初はわからないものですよ」

「な、ステラなんかいい方法ないかな……」

「そうですね、感覚なら私が教えられるかもですね」

「シン様、手を出してください」

ステラの手に俺の手を重ねる。

「田を閉じて手に集中してみてください、これから魔力を送ります」

「ドキドキするけど、特に変わった感じはない……

「すまない……解らないのだ」

「……そうですか、シン様 魔力を強く送る方法が他にもあります
が、お試ししますか？」

「それはどのような方法だ？」

少し恥ずかしそうに下を向くステラ。

「それは……口づけとかその他は……」

あれだ俺は、さとつた。

あれですね、あれ、大人の関係になるのですね、

「そ、その他でお願いしよう」

俺はやる気まんまんだ、美しいセリアとつに……

「わかりました。準備しますね、目を閉じてお待ちください」

心の中で、女性の準備つてのがいるのだ。よいよい、いくらでも待ちます。

しばらくしてステラがそばに座り手を触つてきた。

「ゴクリ、息を呑む。

「シン様、力をぬいてください」

自然と力が入ったようだ、いかんいかん、なんせ初めてなので、力を抜く。

ブスリ、

痛いぞ、かなり痛い……なんだ??瞬間に目を開け痛みの場所を見る。

絶句……

腕に短剣が刺さつてゐ……ひいいー。

傷は浅そつだが頭は真つ白だ。

さつと短剣を抜き、回復魔法を唱えるステラ。

「シン様、目を閉じて魔力を感じてください」

痛みはすぐに消え、ステラの魔力が傷口から注ぎ込まれてゐるのがわかる。

おおなんか分かる、暖かい懐かしい春の木漏れ日みたいだ。そして貴女^{あなた}がとても危険な存在だとも……無念。

傷は見る見る回復して傷は綺麗に消えた。

「ありがとう、ステラなんか解つたよ」

「すいませんシン様、魔力を知るとはいえ傷を負わしてしましまして」

「いや 気にする事はないよ」

俺の大きな勘違いだったのが急に恥ずかしくなつた、アブね～危なすぎる。

回復魔法の練習としてステラの体に全身マッサージのよつに魔力

を込め体を揉み解す。これは特権だな……大満足だ。

早く回復して夢のマイホームから出て行つてもらわなければ落ち着きやしないのだ。

次の朝にぎやかなのでどうしたの?って聞くと、ステラが完全に回復していた。

俺も大喜びしたが……特権が無くなつてちょっと、しょんぼり……まあいい危険な可能性が高いのだ。

ステラは戦闘に強く剣や弓など一通り使えるらしく剣術や体術を教えてもらつ事になり。

毎日稽古するようになつた。あと基本的な魔法や文字、世間の常識を習う事になつた。文字や簡単な魔法はすぐに覚えてしまつた、ドラゴン先生の記憶だらう。

やはりステラ危険な女だつた、かなり強い。

あとステラにすごい魔法を教わつた。

それは転移魔法のインチキ技だ……倉庫とカバンに魔方陣をドラゴンの肉を使って作り物を移動させるのだ。ためにやってみたらうまくいったので大喜びだ。

これで重い荷物も倉庫に一瞬で運べるす。ばらしい

この成功をきっかけに俺の野望は大きく膨らんだ。

こんな原始的な生活でなく高度な文明をここに入れて、サラと暮

፲፻፲፭

早く強くなつて町に行きたい自然と修行に身が入る。

魔法の方は簡単な魔法で「ファイヤー」って唱えて人差し指から小さな火が出るようになつたり、「スパーク」イメージはスタンガンだ手に青白い電流が走る。みたいな変な魔法ばっかり覚えてしまつた。

「アイス」ぽろりと小さな氷が出来る、コップに入れて飲む……なんか違う、実際に見た事は再現しやすいみたいだ。多分攻撃魔法は何回か見れば使えるはずだ。

ドワーフにドラゴンの肉と薬草で良く効く薬をのレシピを聞き大量に作った。正露丸みたいだなこれ。

「最近、シン様見ないわね」

「さつき、うり坊、捕まえて育てるつて、——」
「ながらど」か
に行きましたよ」

「シン様最近いろいろやつてる見たいですよ。薬草の生える場所を増やしたり、実が生る木を増やしたり……」の前はつる芋の種を他の場所に植えてたり

「あ～私も見た～、なんか隠れる様にしてたけどマトベリーの苗を持って」
「ごそしてた」

「食料不足の前に、増やしてるんだね。流石ですわ」

その頃、俺は新魔法の開発の為、朝早くから夜中まで急がしく働いてた。

彼の目的は新魔法でサラの成長を早め一氣に大人まで戻す事だ。ドラゴン先生が大きくなつたんだ、できるはずだ。

あつた、あれがメロミツバチの巣か、蜜蜂と変わらないな、飼育できるかやつてみるか。まず、この痺れ草を燃やして煙で麻痺させて、巣を木箱に移して女王蜂を戻すと。

巣箱に麻痺した女王蜂を丁寧に入れる、んで、ドラゴンの薬1万倍薄めた液をちょっと飲ませて、いくぜ新魔法、

「成長フェロモン！！」

よし！次は働き蜂だ……彼はドラゴンの薬を作り、容器を洗つた水を貯めて、植物や動物、昆虫など食料になる生物に与えく成長フェロモンへの魔法をかけまくつていた。

この効果は絶大で木の実、豚やウサギなど大量に増え働き蜂は本気で働いた。ただ彼は知らなかつた。

成長ホルモンとフェロモンはまつたく違つことを……実が生りそれ食べた人は！？それはしばらく後に起こる。

そんな頃問題が出てきた。

塩などの調味料がほとんどないと大鍋みたいな調理道具がないのだ。食が偏るのも良くないと思い買いに行こうと話したが……い

きなり」の森を出るのは厳しいうしく外には魔物がいっぱいいる。

とりあえず戦場跡地に行く事になった。

俺は町に行く気満々だったがまずは近くか、しおりがない……

第4話 村作り（後書き）

おひしくお願ひします。

第5話 戦場跡地

戦場跡地には、俺とステラで行く事になった。

他の住民は戦闘経験がないので危険だからだ。

場所は南に3田ほどの距離らしい。ちょうどビデオゲームの繩張りから出るか出ないかのぎりぎりらしい。いつ出会ってもおかしくないので、十分に気をつける様にと念をされた。

「サラ行って来るね」

笑顔で握手する、俺は少し力を入れギュッと握る、サラも「キ

「すいません……ランクアップで力の加減が

「大丈夫……慣れるまでしうがないよ……じゃ

痛つて……サラも危険だな、今のうちに教育しないとな……

「シン様、気をつけね～～」

・3・

シロとクロに乗つて走る事1日……疲れた。

日がくれだしたころ戦場跡地に着いた。

1年ほど経つてゐるがその時まま残つてた。

「やつと着いたな、意外にそのまま残つてゐるで使えそうな物は沢山ありそうだ」

ステラは辺りを見ながら満足したようにうなづく。

「今日は疲れた早めに飯を食べて休もう」

俺は「わばつた体を伸ばしながら居心地の良さそうな場所を探す。

「シン様、何をしておられん」

キャンプの準備をするために木を集めてると声がかかる。

「」のような森の中で火を焚くのは危険らしい、なるべく小さく火をつけ、さつと料理してすぐ消すのだ。魔物は火を恐れるが、火の近くには人などがいる事を知つてゐる。町の街道沿いなどは、魔物も恐れて近づかないが、こんな魔物の巣みたいな場所は火は危険らしい。

ステラは森から桧の枝みたいな物を取つてきて、葉を潰し体に塗つてゐる。「これはにおい消しらし」、あと虫除けにもなるみたいだ。

俺もステラに習つて同じよつとする。

近くに簡単な罠をいくつか仕掛ける、転び易いようにロープを張つたり、別な場所で音がするような罠だ。寝る場所は背後を守る為、木や岩の近くで隠れる様に眠る。夕食前から水は控えて小便をしないでいいようにするなど……全然休まらないよ、これじゃ。

それに期待してた甘い夜なんて無い事が分かつた。

ステラに野宿を教わりながら戦場跡地の探索が始まった。

戦場跡地は意外に死体などはなく、焼け野原に少し草が茂つてゐる感じだ。所処に大きな岩やこげた倒木がある、結構広い陣だつたみたいだ。遠くまで見通がよい。

しばらく行くと、武器置き場らしき場所があり鎧や剣などが見つかつた。

使えるかどうか解らないがそれらをカバンにどんどん入れて倉庫に送る。後で修理すればいい。資材置き場にはいろいろあつたが、ほとんどが使い物にならなかつたが、木の箱や丈夫な布に包まれた中には、新しい服や布、ロープなどいろいろある。釘や金槌、スコップ、鉈や鎌、鉄がしつかりしてゐる物は全て送る。

そしてついに見つけた料理場だ。

「ステラ、塩があつたよ」

丈夫な布の袋に塩の結晶がいくつもある、かなりあるな。

大鍋が見つかつた時は大喜びした。

調理器具も全て送つた。木は腐つても鉄の部分がしつかりしてたら修理できるからだ。そして幸運な事に小麦やジャガイモなどが野生化して生えてるのを見つけた。

ジーの気候はほとんど夏に近いので収穫時期が決まってない。

小麦の苗を土^トと取つて送つたり、生えるか不明だが種も送つた。ジャガイモとにんにく、唐辛子、たまねぎも見つかった。

もちろんドーラゴンの薬一万倍液とフェロモン魔法をかけて送つた。

死体を見つけたら鉄の装備などははずして1箇所に集め燃やした。ステラはいつも最後にお香のようなものを燃やして死者の為に祈つた。そのままだとアンデットになるかも知れないからだ。

・3・

3日後

使える物がないか探してると、遠くで声が聞こえる。

そちらを見ると、6人P-Tのやつらが猪を狩りつつしてゐる。

子供みたいに小さい、なんだあれは…?ステラに聞く、

「あれは、ゴブリンの子供だな」

あれがゴブリンか…眺めると、あつやられた……ゴブリン達は全滅した。

あまりに弱いので見に行つてみた。うん、醜いな、しかしあの老婆よりました。

棒でつぶつぶしてると、

「おい、お前たすけ！」

よく見たら怪我をしてるが、死んでない。「ゴブリンなんて生命力

！」

「おお……ゴブリンがしゃべった、すげー！」

「いいから、たすけ！」

「あれだろ、助けたら襲つてくるだろ、それに、かわいくない！」

「やうか……じゃあな……」

「少し話しだけでも聞いていけ、話せるゴブリンなんて珍しいぞ」と言つて話しだした。

わらわの姫は、アセリーノ・ゴブリン・三千三世、3日前に生まれた女王だ、名門中の名門エリートゴブリンだから、言葉も話せるのだ。わらわが生まれた次の日悪夢が起きたのじや、伝説の魔獣、白虎が住処に襲つてきた。父や母を始め全員で勇敢にも戦おうとしたが、一瞬で全滅してしまつた。

運よく生まれたばかりの、私達6人が生き残つた。

今日、国を再建しようと、わらわが女王となつて初戦で全滅したのじや……無念じや、

「ああ、わらわの首を取つて武勲にしてよいぞ！」

なんて間抜けなやつらだ、武勲にはならんし、犯人はシロか、助けてやるか。

「仲間は、お前らだけなのか？」

「ノルマ」

「しうがなこせつだ」

瀕死のゴブリン6匹集めて、ドラゴンの薬を飲まして、回復魔法とフロモンの魔法をする。明日赤ん坊になつてたら大笑いだ。しばらくシロとクロは遠くで見張つてもらおう。

「すまぬ助かつた」

「「「あつがと「ハ」」ぞこせや」」

「じぱりへ、ここに泊まなかりお前ひせうるべに。その間に強へなれ」

「「「わかりました」「」「」

「まず、お前たちは弱い、猪なんて無理だ。まずは小物や木の実など取つて生きる事を覚える、油断や焦りは禁物だ。分かるかアセリーノ

「すいません」

この辺りの木の実や薬草、毒など教えながら採取する。

ここも3日田なので安全と見て普通にキャンプする、そして2日前に教わった、野宿の仕方をいかにもって感じに話す。

「そりクロが取つた猪を持って帰り皆で焼いてたべた。

ゴブリン達は、ステラを見てびびりまくつてた。

「変な動きしたら、殺すわよ
つて、ニヤリ、俺もびびつた。

翌朝……ゴブリン達は普通だった。赤ちゃんにならなくて、よかつたね。

じつらのマーをゴブリン・シックスと名づけた。

適当にさびた武器を拾つて少し稽古する。

ステラが教えるんだけど皆で聞く、もちろん俺も知らないからだ、まあ剣や槍や弓などいろいろな武器の簡単な説明と使い方だ。

昼飯を食べ、その後はゴブリン達は、狩をしにでかけた。

俺達は使えそうな物を探しながら燃えるものは燃やした。

死体や古くなつたテント、人工的に作られた物は燃やすのが一番いいらしい、そのままだと悪い氣が集まりやすくなり魔物が増えるそうだ。

ゴブリン達を見るとクモなど昆虫をむしゃむしゃ食つてたりするので、あまり見ないことにした。

夕方、ゴブリン達が「さきを3匹取つて帰つてきて、シン先生、やつたよ、ほめてほめてと集まつてきただが、かわいくないので、皆で分て食べるとウサギを渡す。

ゴブリン達は、ウサギを滅多切りにして、毛が付いたままモシャモシャ食つて、ウサギうめ～～つと言ふでる。

その姿が老婆達を思い出され、背中が冷やりとしたので、このままだといかんと思つて、少し教育することにした。

「バカモン、それじゃただのゴブリンと同じだ。ヒートゴブリンはもっと、おしゃれだと聞いたが」

まつたくの嘘だがまあいい。

「　「　「えええ？？」」「

俺は残り2匹のウサギの皮を剥ぎ、味付けして、こんがり焼いて渡した。じつちの方がつましいだろ

「　「　「うめーーー」「

その味に感動して今度からうつすると、うなずいた。

そして、火の魔法を教えたらなんとか、アセリーノが出来た。

練習したらうつすとでかくなると教えておぐ。俺できないけどね。

俺のカバンから昔とつていたウサギの皮と交換して（流石に生で

は加工できないので）ちゃんと説明しながらアセリーノの水着を適当に作つた。

適當ビキニー、スタイルに恥じない出来だ。

田も痛くない、このぼうさ加減がしつくじく。

「アセリーノ、女王のだから身だしなみも気を付ける様に」と汚い体をさつと洗えとタオルを渡し、綺麗になつたら、水着を投げ渡した。

他のやつらも、俺も、私もほしーいつ顔してるので、明日取れたら作るといつ話た。

「「「明日はがんばつて取るぞーーおおうーー」」

ゴブリン・シックスに輪が出来た。

ついでに毎口体を洗い、歯を磨くなど教え回復とフロロモン魔法をした。

ゴブリンは馬鹿と思つてたがこいつらは優秀だ。

次の日、朝ご飯を食べ訓練して昼飯、それからゴブリン・シックスは狩に出かけた。

夕方、7匹のウサギを取つてきた。

シン先生やつたよーーほめてほめて、とくるが、やっぱり、かわいくないので

「スキあり」

ペチつと棒つきれで叩いてやつた。泣きそつだつたので、すぐに回復魔法をして、よいショした。

6人とも傷だらけなので回復とフェロモン魔法をして、汚い体を自分で洗えとタオルを投げ渡して洗わす。

汚いとまたペチつとやつて体で覚えさせた。文句を言いやうだつたが、

「お前達はゴブリンの中のゴブリン、ヒートゴブリンだろー。その誇りを忘れるなー！」

「「「はー、シン先生」」

「よしーーー！サギの皮剥ぎ、やるかーー！」

笛で皮を剥ぎ、ゴブリン達に味付けをさせて、焼いて食べた。

味付けのうまいやつ2人にゴックをしろと命令し、皮がうまく剥げなかつたやつは、薪でも拾つてここと命令した。

やはり器用、不器用があり、出来ないやつはひどかつた。

器用なやつに服の作り方を教えながら、5人の服を作つて渡した。

顔は不細工だがマシになつたな。しかしフェロモンの魔法が効くのか見る見る成長する。

今日はこいつそりクロやシロが取つた猪が大量だつたので一つだし、丸焼きにして食べた2日は持つだろつと思つてたが次の日の昼には食べきつた、すごい食欲だ。

次の日、朝稽古をして鹿の作り方をいろいろ教えた、落とし穴を作り追い込むやり方や、待ち伏せなどだ。

ゴブリン・シックスはやつてみると張り切つて張り切つて出て行つた。

夕方、うつほー!うつほー!かけ声と共に木の棒に鹿を吊るして帰つてきた。

俺を見るなり4人が走つてきてシン先生やつたよ、やつたよつて騒ぎ出したので「ばか者!!」ペチつと叩いてやつた。なんで?つて顔するから

「鹿を持つてるのは2人だ、あいつらは手が使えない、今攻撃されてもみる、2人は死んで獲物も取られるかもしれない、4人は前後左右で敵を警戒しながら2人を最後まで守るのだ、それがP.T.だろ、お前達は6人しかいないのだ、1人怪我でも大変になる仲間を大切にして無理はするな!!」

話すと4人は、しょぼーんつでしたので、6人がそろつたら

「よくやつた、流石エリートゴブリンだ」

と少しほめてやつて回復とフェロモン魔法をした、皮を剥ぎ肉を解体して、タオルで体を洗わせ保存食の作り方を教えた。

しかしビックリだ。鹿、俺も初めてだつたから、皆でシカづめーつと叫んでしまった。

次の日、訓練とP.Tの戦い方、3人を前衛、剣や斧と盾、後衛が3人が小型の弓や槍がいいと教えた。

その辺は皆で話して決めると言つてたら、アセリーノが私は魔法で行くと言つた。

やせらせてみたら、かなりよかつたので魔法になつた、でも短剣などで訓練は毎日するように教えた。

ゴブリン・シックスは張り切つて出て行つた。

3時頃、見るも無残にボコボコになつて帰つてきた。ピンクダチヨウにやられたらしい。

あと少しと思つた時に背後からもう一匹羽、来たらしい。

正直ほつとした、無事帰つた事と一度は痛い目に会わないと、いつか酷い目に会うからだ。

今日は仕方なしに回復の水で綺麗に拭いてやつて傷口に薬草を塗りドリゴンの薬をかなり薄めた水を飲まし、回復とフロロモン魔法をした。

夕方には、ほとんど良くなつてた。

晩御飯を食べながら反省会をした。

「まず周りに敵が何匹いるか知ることから、敵の弱点は何処かとか、いつも回りに気配を配るなど話したから、言つてる間違いではない、しかし、その前に、君達は弱いのだよ。」

「ばか者、戦う前に最悪の時を考えろ、逃走経路をまず考えるのだ。絶対に逃げれる道だ。死んだら終わりなんだ、逃げるのも勇気、逃げ道に罠を仕掛けて置くのもいい。まずは生きて強くなるそれからだ。」

厳しくしかつた。

「「「はい、分かりました」」

今日は早く寝よつ。しつかり反省して明日の力になればいい。

次の日、朝飯をしつかり食べ、状態を見る、めちゃ元気だ。回復半端ねーーー！

訓練して怪我の直し方や、毒の時どうするとか、骨折時の処置などを教えた。

昼飯をたべ、ゴブリン達は狩に出て行つた。

夕方、周りを警戒しながら、ゴブリン・シックスが帰ってきた。猪を担いでる見事だ。

「「「シン先生やりました」」

振り返り際に木の棒で……スカ！？見事、誇らしげなゴブリン達の顔を一人一人見る。

「うむ……やつぱり、かわいくない。

「よくやつた

猪の皮を剥いで肉をばらして、焼肉パーティーをする。

「「「うまーーー」」」

笑顔もやつぱり不細工だった。しかし、にぎやかに食べた。

「お前達はまだまだ弱いが、生き抜く力はもつある。明日が最後の修行だ」

次の朝、訓練してお別れの挨拶をする、

「もう、お前達の住処に戻つても大丈夫だ。そこで国を再建しろ、俺は北に3日行つた所にドラゴンの巣がある、その巣を守つてゐるもしなにかあればそこに來い。」

「「「ドラゴン……すげーーー」」」

「しかし、緊急でない限りここより北には行かない事だ。ここからドラゴンの縄張りだ。これを渡す、これを見せればドラゴンも話が分かるはずだ」

壊れたルアーで作つた首飾りをアセリーノに渡した。針は折れてる。

キラキラ輝く魚の首飾りを見て、皆、すげーすげーと言って、感

動で泣きやつだつた。

「世界に一つしかない、珍しい物だ。大切に守れ」

「「「はい、先生」」」

後、釣り針が入つてた入れ物に、ドラゴンの薬を1個を10個に小さくした、小さな薬玉60粒を渡した。

小セイゴブリンには普通じゃ効き過ぎると思つからだ。

「これはめったに手に入らないドラゴンの薬だ、怪我や病気などで重症な時1つ飲め、大切にしろ」

「「「ありがとうございます」」」

後は戦場跡で拾つた、ぼろぼろ武器を適当に渡した。

ゴブリンの住処はクロとステラに掃除してもらつたので、死体などはないはずだ。

「「「さよなら、シン先生」」」

「おう、毎日訓練して絶対、死ぬなよ～～

涙の別れをした。しかしゴブリン・シックスはすこしがたな！勝てる気しね～～

ドラゴンの薬とフェロモン魔法の効果か、その後、大繁殖してその名を成す事になる。

戦場跡も大体片付いたし、明日帰る事にした。

ゆつくり昼飯を食べてから、のんびりしてると人の気配がする。

そこには、いかにも戦いなれた感じのドワーフが立っていた。

俺は警戒しながらいつでも剣が抜けるように体を動かしながら話しかけた。

「ドワーフか、魔物かと思つてびつくりしたよ」

「若いの警戒せんでいい、騎士でもなさそつなので、なにもせんよ」

人懐っこいくらいに笑う。

「騎士だとなにかあるのか?」

「脱獄兵になるからのう……まあこの戦じゅや罪も軽いと思つがの」

「なるほど、大変だなおっさんも……前に会つたやつにも騎士と聞違われたしな」

「ほー前に会つたとは……どんな人であつたか いや すまん人を探しておつてのう」

俺は出会つた事を話して、ここで食料を探しにきた事も言つた。

「なるほど、そうであったか。しかし、お主嘘が下手だのう

「嘘などついていないが」

ドワーフのおっさん何処にこんな殺氣があつたか解らないが、いきなり襲つてくる。

「シャドウを従えてるのは貴族だけじゃ」

「――

突然の殺氣で一瞬遅れる。

「シン様、危ない」

背後から声が聞こえて暗の影から出でてくるステラがドワーフの一撃を止める。

「大地の精靈よ、絡み取れ――」

ドワーフの呪文と同時に俺を蹴り飛ばすステラ、

「ステラ――」

振り返るとステラは土の牢に入っている。

「貴様ああ――！」

俺は腰の剣を抜きドワーフに切りつけるが、

ガシャン！？

異様な音と共に剣が砕け散る。

ドワーフの戦斧は俺の剣を砕いたのだ。

砕けたと感じた時にはロングソードを手放し身をかがめて短剣を手にもう一歩踏み出した。

短剣の距離、後は素手でないと無理な間合いまで一気に迫った。

バキン！！

短剣がへし折られた！？

ドワーフは戦斧の勢いを殺さず、戦斧だけを手の中で回転させて目の前の短剣をなぎ払ったのだ。

一瞬殺氣が目の前をかすめたので、手がわずかに止まつたが。

そのまま刺せば片手を持つていかれたにちがいない。

とつさに短剣を手放し俺はさらに踏み込み素手の拳に「スパーク
！！」と念じ放つた。

青白い電流が拳を包むと同時に相手のわき腹に打ち込む。

バチバチ！音と共に吹き飛ぶドワーフ。

イメージはスタンガンだ、人には初めて使つたがうまくいった。

しばらく動けないはずだ。

「お主やつおるの?」

って起き上がりってきた。

ゾンビかおつむか……

ステラも捕まつてゐるし、仕方ない……

両手を地面につけて叫ぶ。

「シロ、クロ、R1還」

左右に青白い魔方陣が浮かび、中からシロとクロが出て来る。

「んな事しなくても呼べるのだが、とにかく見た目がかっこいいのでやつてるのだ。見た目がね。

ステラを守るように移動しながらカバンから武器を探し取り出す。

さびたロングソードだった、渡し忘れたか……無いよつましか。

相手をにらむ……

えつ?

「すまん、すまん ガハハ」

と笑いながら武器を捨てて座り込む、殺気が抜けて子供のよう

クロとシロを見ている。

「それならステラを開放しろ……」

「本当にすまなかつた」と、いつて頭を下げる。

背中にステラ気配がする。

「ステラ大丈夫か?」

「はい、シン様」

何処にも傷はないようだ。

「白虎に影狼か……信じられん

ぶつぶつ言いながら、ワーフは不思議そうにしてる。

「突然どうしてなんだ?」

俺は聞いた。

背後にシャドウがいたのに気がつき、何処かの貴族と思い捕まえて真実を聞こうと思つたらしく。

最初の1撃は殺氣を込めたが、手加減してあり出てきたシャドウを捕らえる為だつた。

普通の貴族なら、腰を抜かすか逃げ出すらしく。

それなのにおぬしはシャドウを見て激怒し攻撃してきた。

そんな人間は今まで見た事なく、恋人を奪われたような顔だったらしい。

シャドウは見た目から黒く魔のイメージが付き易いからめったに人間の前に姿を見せない種族で、しかも暗殺や諜報に長けてるから、国か一部の貴族が裏で奴隸を買い育てるのが常識らしい、一般人は見るだけで怯えるほどだ。

ステラやはり危険だつたか。

おかげで殺されそうになつたが……ガハハつて笑つた。

「おぬしの剣に殺氣がなかつたのでたすかつたよ、人を殺した事がないだろ?」

「はい、人殺しなんてしないですよ」

「なるほど、だから助かつたか最後の魔法は殺さない威力だつたか、剣はシャドウに習つたのか?」

「そうです」

「素直に答えるクロやシロが警戒してないから、信用できるみたいだ。」

「なるほどな、あんなやり方は普通しない!捨て身の攻撃だ、生きたいなら生きる剣を学べ」

殺きないのに、もつとも効率のいい動きだつたらしい。

「ブリン・シックスに言った事を言われてる気がする。

ステラ、「このじいさん大丈夫かと聞けば

「信用できる

話すのでもうじきを信じる事だった。

第5話 戦場跡地（後書き）

まひじくお願ひします。

第6話 村作り2

「」のドワーフのおっさん、ダグラスって名前だ。

ダグラスは一流の鍛冶屋だつたらしいが、トライゴン討伐の為國から武器を大量の依頼と出兵命令をうけた。何とか武器を作り國に收め、村を代表して十数名が戦場に出て、ダグラスは運良く生き残り村に帰つたが村は荒れ果ててた。

村の人の話ではダグラスが村を出てすぐに、盜賊に襲われた跡で多数の村人が殺されたりさらわれた後だつた。必死に行方を探したが手がかりが無く、奴隸市などを探してた時、ほとんどが売られて戦争に連れて行かれたと聞く。それから戦場跡で妻や村人を探し回つていたらしい。

1年近く経ちもつドワーフの村に帰ろうと思いつく戦場跡近くを通つた時、煙を見たのでもしかしたらと思い来たらしい。

俺はダグラスに簡単な説明をして聞いてみると話し、木の板にダグラスを知ってる人がいないか書き倉庫に送つた。

「シン、お前の村には何人くらいいるのだ？」

「22人ですが、俺以外は女ばかりだよ」

「ヤリと笑うダグラス

「ええの〜ハーレムではないか、ドワーフは何人だ」

「 もちろん……ハーレムでもないんですが」

「何を言つておるワシが若かつたら、ウハウハで寝をな「いぞ、しつかりせーーー！」

バシバシ背中を叩きながらハーレム作り方講座を開くダグラス。ハーレム……いいかもしれない。メモにちやんと取りながら考える。

「しかし」の森から出た事ないとは、一度は街や村を旅するのもいいかもな

「そうですね、俺も旅をしてみたいんです」

「しかし クロやシロは人前に絶対見せたら「いかんぞ、魔王と間違われる」

「やつぱりそうですか、よほどでない限り使は無いようにします」

「一人で行くほうがいいかもな、ステラさんかのう。シャドウも恐れられるし、他の人を守れるならいいがまだ 厳しいかもしれない」

「なるほど……」

そりそり返事をてるかと思いカバンを見る。

えええそんな！！

もうドワーフ最強の妖怪、ブー長と心で呼んでたのがどうも妻ら

しい。

「ダグラスさん、嫁さんは俺の村にいるみたいだ」

「なに…… 生きてたか」

「うれしかったに笑う田には少し涙がうかんでる。

「シンの村は何処だ?」

「「」」から歩いて3日かな」

「今すぐ出発しよう、連れて行ってくれ

「いまからですか?」

「今すぐじゃ

強引に押し切られ帰ることになった。

シロとクロを呼び出し俺とステラがクロに乗り、ダグラスはシロに乗つて出発する。

夜は危険なので、ゆっくり走り明け方には村についた。

「ダグラスあそこがそうだ」

「そうか ダイアン~~

叫びながら走つていいく……涙の再開と思つたが。

妻の顔見て……絶句！！

あ、若返ってるの話してなかつた。

最初はポカーンとしてたが、だんだん理解してたらしく仕舞いには妻に手をだしたるーつて怒り出す。

ダグラスの話では「あんな 絶世の美女にてを出さないやつはない！」「らしい。あのブー長が！？」

「シン様になんてこと言ひの」

バシバシ、ダグラスを叩く妻、まあいい危険人物が一人いなくなつた。ダグラスも苦労したのだな、俺にはわかる、そしてあちら側へと墜落ちたのだね。

その時……膝を崩し苦しそうにするダグラス。

えええ！？ 昨日戦闘で受けた傷と疲労で限界だつたみたいだ。

慌てて服を脱がすと結構傷が深い……良く我慢できたものだ。

ベットに連れて行つてドラゴンの肉で作った薬を飲まし回復魔法を使う。

昼からはダイアンに任せて俺も寝る事にした。

ダグラスは次の日も寝ていて2日目の朝起きた。

起きたダグラスは無口になつて一田中村を見て回たり妻と話したり考えて夜、

「シン 貴様のハーレムは俺がのつとる！！」

「ヤリ

「えええ～～

「てのは冗談だが、本氣で村を作るなら協力しよう

焦つたぜ、ハーレムはのつとてもいいがサラはやらない。

「そこまで考えてなかつたが……いいのか？」

ダグラスの話では、こここの土地は非常にいいらしい、水源もあり土地も肥えている、魔物が襲つてくる心配今の所ないし、国から税金の心配もなく盜賊もいない、もし襲われても守り易い地形だとう。

それにこの周囲には、同じ様に隠れて暮らす人が数箇所あるらしくその人達も仲間に入るかもしれない、なによりドラゴンに襲われないつて事だ、村に来なくとも伝えたいらしい。

良く見るとダグラスの顔が少し変なのでもしかしてと思ひ

「ダグラスさん 田を閉じて動かないでほしい」と突然言つた。

俺は白々しく変な呪文を唱えながら

「我とドラン先生の祈りで神々に奇跡の力を、東南西北リーチ一
発うんたら、かんたらチョンボー！」

「

九字が解らないので怪しい言葉を並べながら、ダグラスの顔の皮
を、ペロリとはがす……

神の奇跡を見るように皆さん騒ぐ……おっさんサラを奪うなよと
心で祈た。ドワーフのブー長、今から俺は同志だ、激しく応援する
ぜ。

次の日、流石ブー長、いやダイアンと安心する……見た目30代
に若返ったダグラスは妻に尻を叩かれながら新居を作る事になった。
俺も快く手伝つた。すばらしい。なるべく遠くに家は立てさせた。
ダグラスのおっさん、片足は確實に墓場に入ったぜ。

皆で作るので作業は早い、戦場跡から持つて帰つた道具があるか
らだ。

村作りは本格的で、畑から水路までいろいろ計画が作られた。

俺とダグラスは他の隠れ里を回る事にした。

ダグラスに連れて行かれた場所は、大体洞穴で酷い状態だった。

俺達は薬を飲ませ、不思議な水と食料を置いて次々と回つた。

もちろん怪しい呪文を大げさに唱えながら薬は飲ませた。

ここで効果のあったのがペットボトルだ。

ガラスやプラスチックがないみたいで、魔法の入れ物だつたらしい。

病は氣からでないが、カバンから次々と出すペットボトルの不思議な水は効果はばつぐんだつた。俺達の村の場所を教え、移る気があつたらいつでも歓迎すると話しぬ次の隠れ里に向かつた。

隠れ里を全て回つて村に帰つた。

ぞろぞろと人が集まりだし、村は大変な事になる、家作りや畑つくりに毎日追われるのだ。

村人は140名近くになり、テントだらけになつた。

再会を果たすカップルや夫婦で引っ越してきた人たちもいたが圧倒的に女性が多かつた。

男40名で女性100名くらいだ。人間はいなかつたが、全員若返つていた。

男たちはどう見ても美しくない、妖怪に求愛してカップルなどができた。俺もフリーな男に妖怪どもを進んで与え彼らは泣きながら喜んだ。俺もやつと妖怪退治が出来、心が落ち着いた。そしてダイアンありがとう。彼女の力あつてこそ出来た計画だ。

そして俺の好みの女性達が俺の周りに集まつた。サラすまない、ハーレムができた。

その夜、家に帰つて寝よつとした時、俺の体に異常があつた。

頭の中で声が聞こえてきたのだ。

「やつとつながつた、俺、ベーケンゲルヘーベン

キョロキョロ周りを見るが誰もいない。ふ、今日の妄想はやばすぎたかな、気をつけよう。

「無視するな、返事しろ」

また声が聞こえる。安心しそうで、疲れが出たのだな……取り合えづ返事してみるか。

「ビニールなんだ?」

「お前の右耳に住んでる」

えつ……?

「住んでるって?」

「そうだよ、寄生虫みたいなもんだ。」

終わった……聞かなかつた事にしよう。お休み……耳を塞いで耳を閉じる。

「殺さないから安心しよ、無害だよ。それどいつもかお前の為になる」

「お前まさか脳に直接はなしてゐるのか?」

「そうだよ、存在してる事を教えようと思つてね」

「あの時融合したクラゲか？」

「ちょっと違うが似たようなものだ」

ベニクラゲの話では……ほとんど仲間はシンと融合したがわずかに生き残つて、この世界に来たやつもいた。

クラゲは海の中でしか生きられないからすぐ、卵の状態にまで体を戻し運よくシンの右目に入り込んだのだ。俺の目は海か……

それから魔力なるものを吸収して進化を繰り返しやつと会話できる様になつたらしい。

それつて……どうやって進化してクラゲが話せるんだよ。

「俺の脳でも奪つたのか？」

「その通りだ」

ひいいいい

「大丈夫だ、お前の脳はスカスカだったから、一部つかつてゐるだけだ」

スカスカ～～！？なんてこと言い出すのだこのバカクラゲめ～～！

「ちなみにお前の記憶をほとんど見たが、実にアホだと解つた……

脳は1割も使っておらず、その大半がはスケベな事ばかりだったからな

ガク然とする俺……こいつは殺さないといつか殺される

「大丈夫だ、これからは俺が無い頭を良くなるようにしてやる、言
い忘れたがお前の考てる事は解るからな、頭が2つになつたと思
つてあきらめる」

慌てて船の所に行つて、割れたガラスで右目を見る……

コンタクトレンズ見たいなのがヌルッと動き！？

ひいい、今なんか、ちつさな虫が合つたよ。

ついに人間ではなくなつてしまつたんだ……ショックで力なくベ
ットに入り眠つた。

次の日アーラゴン先生の所に行つて、涙目でどうすればいいか聞い
た。

「先生……右目に変な生き物が寄生したんですね～」

「ふむふむ……詳しく話してみろ」

今回は真剣に話を聞いてくれてる……

しばらく考え込んでいたがよく虫を見せてみるつて話になり、顔
がくつ付くくらい近づき、上からのぞきこむ。襲われそうだ。

その瞬間、キラリと輝く液体が左目に入った。嫌な予感がする。

「シン大丈夫だ、そいつらは役に立つ」

それってまさか……そんなへ

慌てて左目を鏡で見る。

「よろひよ」……

って感じに左目の中にいるやつと目が合つた。

はあ終わった、もうすぐここに乗り乗つ取られる。

一人落ち込んでると、ダグラスがやつてきて
「ま～気にするな、なんとかなるよ」
バシバシ背中を叩いて陽気に笑つて去つて行つた。

全然慰めになつてないよ、おっさん。

村を出よつとして海を眺して旅をするしかない。

ここつらも海に行けば自然に帰れるはずだ。

ハーレムを作るのはその後だ。

「のままではハーレムの前に玉の悪魔か、ドラゴン先生に殺される。

俺は旅に出る準備を始めた。

第6話 村作り2（後書き）

おひじくです

第7話 肉体改造

俺は旅に出ることを村の住人に話した。

現状、村にも必要なものが沢山たりないので貢出しきらうこと思つたのだろう。

賛成する人が多かつた。

その日の夕方やつぱり來た、
「なんて汚い体なの……」

女性の声が頭で響く……

「すいません」

とりあえず謝つておく、危険な存在は間違いない、左田のやつは女が面倒だな……クラオとベニコにするか……まずベニコの性格をよく知り、彼女を手の平で……もとい、田の中で上手く転がさないとな。

ドラゴン先生の中にいたやつだ、知能も高そうだが性格も悪そうだ。

「あなたも何やつてたの」

クラオにも怒つてゐ、おお仲間割れか……クラオと組むしかないな、ここで折れたら負けだ。クラオがんばれ、男性代表としてガツンと言え、クラオ俺の心が分かるのだろう昨日の夜話したでないか、

友情を思い出せ、やつはまだ完全に俺の脳を探知していないはずだ。

「明日は肉体改造するわよ、手伝いなさい」

「いきなりクラオに命令してるぞ。ああ終わった、もうクラオは駄目だな生存競争で負けを認めている。心の折れた音が聞こえた気がした。」

「そして今、なんて言つた？ ひいい、いきなり改造つて……やばすぎる極悪だ。」

「明日はもう、人ではないかもしない。肉体改造つてまさか俺は新しい人形として実験されるのか、「あれ？ 間違ったかな！？」ってちょっとのミスでも精神が破壊されそうだ。」

「俺は腹を決め夜這いすることを決めた、今しかない、今夜しかない。」

「俺はサラを呼びだし、説明してまず契約の実験をさせてくれと頼んだ。」

「契約ですか？ 普通にできますよ！」

「なんだって～～今すぐしよう今すぐだ」

「ありがとうございます。シン様うれしいです」

人獣族では契約は結婚みたいなもので家族になると同じ感じらしい、契約者の力をもらう代わりに忠誠を尽くす。希望の相手と契約するのは最高の幸せらしい。よかつた、安心したよ。俺もサラが

大好きだから。

「で、契約はどうすればいいの？」

「シン様の血を私が飲み、私が契約の申し出をするので、シン様、私の名を呼び契約すると言えます」

分かった、俺はナイフを取り出し、バスと腕に刺した。

「サラ、好きなだけ飲んでくれ」

結構、血は出てるが気にしない。俺には明日はないのだよ……

「少しでよかつたんですが。すいません、いただきます」
目を閉じてペロペロなめる……なんか少し超口臭を理解した気がした。

「準備が出来たら言つてくれ」

「シン様、私の名はサラ、これより契約します。私の名を呼び契約してください」

「サラと契約します」

「ありがとうございます。契約できました。」

あれ！？大きくならない、おかしい。そつか召還するんだった。やばい、今意識を失いかけた。出血しすぎたか？慌てて止血して、話す。

「今夜はサラと2人で寝たいのだけどいいか」

「はい、『J主様』

「召還するのでちょっと待つて、あ服やバイかも……破れそうだな、脱いでタオル巻いていて」

サラはうれしそうにうなずき、夢のマイホームに召還で来てくれることになった。

俺はマイホームから合図を見て召還した。

「サラ、召還」

白く光る召還陣から大人のサラが出てきた。美し過ぎた、触れるだけでバチがあたりそうだ。

「すまないサラ、明日から人で無くなるかも、知れないのだ、初めてはサラがよかつたのだ」

「大丈夫ですよ、シン様は化け物の様にはなりませんから」

明日の肉体改造に、怯える俺をやさしく抱きしめてくれる。

「シン様ありがとうございます、私も初めてなんです、これからは私でよければいつでもお願ひします」

そして一人の熱い長い夜がはじまった。

朝食を持つてサラが来た。

「おはようござります。シン様朝食です」

声のほうを振り返ると、むらこに美しくなったサラがいたが、幼女に戻っていた。

「おはよう、もしかして、またランクアップしたのか？」

「はい、やだそんなに見ないでください、恥ずかしい」

ぬひやめぢやうれしそうだが、すこし俺はがっかりした、しかしもつ思い残す事はない、かかつて来い肉体改造、今俺の精神は最高に安定してゐるぜ。

一人で朝食を食べ外に出ると……痛いような目線が刺さる、なんだこれは……やばい犯されそうだ。

ドラゴン先生の指示なのか怪しい薬も作られてる……計画的だつたか。

逃げるよつに部屋に入つて旅になにがいるか考えてると、それが始まつた。

肉体改造だ……

急に吐き氣がして、黒いタールを吐いた。タバコかこれは……煙家だつた昔を思い出す。

「まずは肺を掃除して、それから内臓や骨にたまつた毒をだすわね、なにこれ、メチル水銀や鉛、ダイオキシン、アスペストまで。微量だけいろいろある、ひどいわね、プルトニウムこれなんか不思議だわ集めて研究して見ましょうか、それから筋肉纖維や骨の強化、腱……」

最後まで聞き取れなかつたが、プルトニウムはいかん、捨ててくれと激しく祈つた、さらに気持ち悪くなりゲロゲロと体の毒を吐く俺……科学反応でも行つてゐのか……悪魔め……

心配してステラとサラが看病してくれた。

夕方まで肉体改造が続き毒を吐きまくつた。

やつと落ち着き夕食を食べ怪しい薬を飲み、ふらふらと布団にもぐつたが……！？

そこには全裸のステラが待機していた。

妖艶な瞳で逃しませんよと言わんばかりに、じゅるり。逃げる元氣も無い……すまないサラ。

後は、もうクモの巣にかかつた昆虫と思いステラに体を任せた。

激しい夜が2人を待つていた。

翌朝めちゃめちゃ美しくなつたステラがいたのは言つまでもなかつた。

俺はあまり気が付いてなかつたが新しく住みだした村人は、最初から夫婦だつたり新しくできたカツプルでイチャイチャしたり、若返つて体力も復活したりで夜な夜な激しく契つていた。

愛し合ひの音がダイレクトに聞こえるのか彼女たちは不満をつのらせていた。

カツプルにならなかつた美女軍団は60名は、シン様親衛隊なる結束を作り誰が一番尽くすかと競い合あいだし、サラに手を出したことを切欠に暴走しだした……後で分かつたがドラゴン先生が薬の調合を指示した時「旅に出たらしばらく会えなくなるので、皆、思い残す事無い様好きにしていい」と許可を出していたのだ。

毒を吐くことはなくなつたが肉体改造されてる俺は毎日激しい筋肉痛で動けなくなり寝たきり状態だつた。

食事を持つてきて、俺を襲つて帰る、看病といつて来て体をさすつてくれ最後に犯される。アリ地獄に落ちたアリの様に動けない体で抵抗したが無理だとさとり、無抵抗の戦いが始まつた。ガンジー作戦、今から俺は石だ、石は痛みも感じない。さつとつたぞガンジーは石。

次の日、サナギから孵化した蝶の様に美しくなる彼女たちを見た他の女達は、

「また出遅れた今日こそは……私がシン様を」

悔しがりまさに1日中襲われることになつた。ドワーフはまだ良かつた。事がしなやかで、しかし人獣達は激しすぎた。今俺筋肉痛と叫びたいが痺れて動けないし話せない、この時、心にあつた、「

にや」つて話す人猫リストは削除された。人獣系は危険……ドワーフ、考えてよし。

その日から、俺は人獣を見ると蛇ににらまれたカエルの様になり、素直にあきらめた。これつてドM計画か？俺は洗脳されないと意思を強く持つた。ガンジーは岩。

肉体改造6日目ベニコが「今日が昨日は楽になるよ、最終段階いきマース。」うれしそうだ……悪魔め！！それはいきなり来た……全身が攣つてます、呼吸がしんどいとは……そして俺の部屋には最終日と知つてか順番待ち状態だつた。

食虫植物につかまつて、動けなくなつた虫の様に、体力と気力を吸い取られていくただ耐えるだけだ。まさに虫の息だつた。彼女達も明日には不思議な花を咲かせた様に美しくなり微笑んでいるだろ……すべての女が満足して帰つて行つた。ガンジーは壁。

ふと、俺の息子が気になつて、大丈夫だろつか確認するため、ゆっくり首を起こし見た。

絶句……

それでも俺の息子は、いつでもかかつて來い！と言わんばかりに、なぜか元気であった。息子は城。

流石マイ、サン。ネバーギブアップの心は受け継いだ。俺もあきらめないぜ。

その時ふと子猫が蛇を倒しての姿が思い浮かんだ、これが天啓か？いや、これを天啓でなければ、なんと呼べばいいのだろうか。

体が少しずつ楽になっていく、涙があふれそうだ。

人猫計画復活……「にゃ」って言葉を聞いて、熱いものを感じれば参考にしてよし。注意深く観察すること。危なく心が折れる所だつたぜ。

一度抱かれるとしばらく満足なのか、体の変化で満足するのかわからないが、1週間で60名を抱いたことになった。俺は船に移動しコレクションボックスから手帳を取り出し、

男のロマン計画シリーズNO1、ハーレム計画に大きくバッテンを書き王様計画に変更した。

また側室候補に人獣は危険、ただし人猫は研究の価値あり。ドワーフ、研究の価値あり。と新しくページを作った。

体のほうはすこぶる調子がよく、身体能力がかなり上がってるみたいだ。

化け物にならなくてよかつたと安心して、旅の準備が始まった……

……が

簡単に問題は解決した。

カバンに6箇所、召還陣を書きそこに必要な物を置けばいい事になつた。

武器庫と食料庫、倉庫と金庫、通信庫となつた、もう一つは秘密のコレクション置き場にした。

村人の数名がドラゴン先生と話しができる事になり村をまとめ問題は先生と相談するよつに決まった。

ドラゴンの巣を1部改造して、食料庫や金庫を作った、ここに秘密のコレクション置き場も作った。

不思議な水がでる場所は冷蔵庫の中のと同じ感じなので保存には、もつてこいなのだ。

金庫も一番安全ということでそこに作った。

通信庫は村の中心の家に作り（シン様親衛隊がほとんど住んでる大広間俺の城になるのかな？）手紙を書いて送ったり、いつでも誰かがいる場所に作った。簡単な食事なら作ってくれるらしい。

今の村の状態だが20人くらいが泊まつても十分な広さの家が一つあり（最初の家）そこから増築を繰り返し12畳くらいの部屋を左右に6個作りコの字の様になつた6人が一組で部屋で住んでる。

中庭は村人の集合場所となりそこでみんなで食事する。

この家を囲む様に夫婦の家を作つてゐる。

ちなみに右奥は夢のマイホームであり左奥はドラゴン先生の巣がある。

夢のマイホームはサラ、ステラが住むことになり、増築してベット10ほどある医療施設ができる予定だ。

今の状態では食事はまとめて作り（食事係りが作り）みんなで食べる。

それぞれ得意な分野を伸ばしてほしいので、ほとんど希望道理にみんなやつてる。まあ種まきや収穫時期、家を作る時などは全員でやつてるのがきまりとした。

武器庫はいろいろな武器が戦場跡から持つて帰つたのでそれが置いてあり、ゆっくり修理したり作つたりして置いておく、ドワーフ達が、

「家ができて落ち着いたら、俺たちが武器を作つてやるから」つて張り切つていた。

俺も武器を売つて、村に必要な物を買つて送るよと話し約束した。

同じじみつて、薬作りの上手な者や、狩の得意な者、農業で作るから穀物を売つてくれと……頼もしい仲間たちだ。将来は麦や米などから酒を造りたいなと思つのだった。

後1週間事が早ければ俺はこのすばらしハーレムで一生過ぐしてたのかもしねない。早まつたか？と思ったがまあ旅をして強く大きくなるのも人生だと思い、自分に言い聞かせた。よしすばらしい生活（科学）を手に入れる為いくのだ。

肉体改造されてなければ俺は親衛隊に男を搾り取られ死んでいたかもしねないのだ。

待つてくれサラ。

「おいシン、毒が抜けてすつきりしただら
クラオが話す、

「ああ、そうだな体が本当に軽くなつた。今なら何でもできそうだ
それに俺たちは使えるぜ、なんせ3人で1つだから、三人あつま
れば……最強のバカになれるものぞ」

「バカもつとまじめに話しなさい」

「すまないベーハ」

「まあ今はまだ成長中だが俺はお前の動きに微調整ができると思つ
てくれ、お前の体の動かし方の補佐を今してんだけ馴れたら今の倍
まで動けるぞ多分、肉体改造するが」

「……やっぱ魔物になるんですね

「そう脅かさないのクラオ、私はいまだと記憶よたとえば風景を一
瞬で覚えたり音を覚えたり念じれば正確にだせるは、記憶の中だけ
どね、他にも魔力探知やいろいろ出来るみたいだ」

なんか、君たち使えるね前の世界で会いたかった……テスト10
0点とかできそうだ。

「この一人はだろだろやつと分かつたか、つてうなずいてた気がし
た。

もしかして視力もかえられるのか?と思い、ちよつと遠くで水浴
びしてゐる人を見つめる。

ズームされはつきリストラの姿が見えた。

「変体、そんなのに使わないで……ふんふん

頭でベニコが叫んでる。

静かにステラの背後に近づく、クラオ！ナイス！。音を立てないで歩いている、すごい……すばやく胸をもみ走り去る、忍者のように動く俺すばらしい。ステラかなりでかいな、あの時は生贊だったから、ほとんど記憶に無いが……じっくり見て触つてみたいものだ。襲うときはまず裸になつてアピールしてから襲うそんな規則を作らねば。

そして明日の準備をしつかりして夕食を食べに行く。

みんなと食事をして明日朝出発することを話す。

「俺は旅にでる、強くなつて帰つてくる。皆もがんばつてくれ

お金はあるのか?と聞かれたのどこでとにかくにドラゴン先生にもらつた金貨を見せる。

唚然とする村人その後ダグラスが真剣な顔で話してきた。

「その金貨は数百年前の物ですごく価値があるがそんなの使えば、たちまちお前は捕まつてありかを吐けと拷問をうけるだろ?……それは使わないほうがいい得に今は

そうなのか??

うなずく村人そして お金の価値を教わる簡単に 小銅貨 銅貨
鉄貨 銀貨 金貨 大金貨 白金 大白金の素材で使われ価値は
約10倍ずつ増える。

銅価が約10円の価値らしい、ただ物々交換の代用なので価値は
作った国や場所で結構変わるらしいが、精度もあるのだろう。

小銅貨	一ギル（円）
銅貨	十ギル（円）
鉄貨	百ギル（円）
銀貨	千ギル（円）
金貨	万ギル（円）
大金貨	十万ギル（円）
白金貨	百万ギル（円）
大白金貨	千万ギル（円）

こんな感じ、お金は村人が少しづつ持つてゐるのを出してくれた
… ありがとうございます

35万円集まつた。大切に使おう。単価はギルです。（そのまま
円で考えてください）

夜、俺はサラと少しさなし、やっぱ無理だ3年は待つてくれと頼
んだ。サラは待つてはりますと、申し分けなさそうに話した。

「シン様、すいません」

「大丈夫だ、いい方法が思いついたら召還するよ」

「それまでに強くなつてます、そしたら2人で旅ができますね。」

「俺もがんばって強くなつるよ」

では……お休み～～、疲れたなあ～～と布団にもぐつたが………？

またもや全裸のステラが待機していた。

妖艶な瞳で側室は私ですよ、2番は私と言わんばかりに、じゅるり。

肉体改造された俺を思い知れ！－3ラウンジKの俺は勝利した、俺なんか、かなり夜は強くなつてゐると考え眠つた。

朝早く起きて寝ぼけて甘えてくる、ステラも大切にするからサラを鍛えてやつてくれと頼み、お別れのキスをして旅立つた。

第7話 肉体改造（後書き）

おひじくお願ひします。

第8話 村を出で

村を出でまつすぐ西に向かつた。

10日も行けば小さな村がありやうに、15日ほど西には自由商業都市があるやうに。

国の規律も緩やかで一人立ちする人は最初に、ここを田指すのみたいだ。

俺は久々にシロの背に乗つて思い切り走らせた。

気持ちいい〜なんていいのだやつ。

それに夜も気にしないでゆつくり寝れる。ここつら強いから安心だ。

さらにすげることに、ベニコは魔力を探知できるらしく脳に直接刺激して円状のレーダーみたいのを出してきた。

俺の記憶からこれが一番再現しやすいらしい、集中すればよくわかるが生物反応が円の中でもピコピコ光つてる。

シロとクロの魔力が強すぎて見えにくい……まあ、危険がきたら起こすと言つてたので今日は気にしない。

1日はぶつ飛ばして走り翌朝はのんびり進んだ。

歩いて3日くらいの距離か、そろそろ危険かもな。

気持ちのいい草原に出たのだ、ま・せ・に・アフリカン……

まさに俺は「」とばかりに服を脱ぎコレクションボックスから毛皮で作つたいかにもジャングルの王みたいな格好に着替えて

「ウホホ~~~~」

雄たけびをあげながら草原を疾走する。男のロマンだ。

今回は棍棒でなく石槍だ。やはり、きもちいい。

するといかにもつて泥の沼を見つけたので、思い切りダイビング。

「グハハハ、気持ちいい！！」

子供が田んぼで泥んこ大会などをして遊んでるのを見て一度はやつて見たいと思つてたのだ。

まさにじロアロアになり満足してそのまま走り出す。

「つまうま つまうま~~~~」

我ながらひどいと思ったが今は一人だしいいが、うははは、夢を一つ叶えた。

遊びつかれてゆつくり寝でもしようかと丘に登つて転がる、遠くで、つまつまつて聞こえる。

アリーナー！

田を凝縮してみるとクラゲが反応して望遠鏡のレンズのように動き遠くでも見える。

か…… 獣を狩つてる原始人がいる、おおこんなところにも仲間がいたの

あいつらは魔族か？とベニコに聞く。

あれはドラゴンの記憶では、かなり知能の低い人間ですね。原住民つて所か……参戦しよう。

卷之三

ばれないよう先回りして、狩りをたすける。

一
ウホウホ

すぐに仲間に溶け込んだ。

ああ～～わかるよ、『先祖さん』ひやつて生き延びてきたのですね。

血はつながらないけど、ブラザーと呼べる言葉はいらない。

「ウニ」

とお互い喜び合ひ、

「シンは言葉がわかるのですか？」

ちつ舌打ちしながらベニコに話す。

「そんなの、ノリだノリ……翻訳はお前の仕事だろ、よく聞いて翻訳してくれ、クラオなら判るよなこんな気持ち？」

「変体で単細胞なのがよくわかった」

「なんだとくそ、クラゲに男の気持ちがわかるか？」

もう知らん気分を害しやがつて。

そして獲得物をしばり、凱旋していくブラザーに俺もついていく。

その時

「うわああ～～」

叫び声が響き獲得物の一つを大蛇が襲つてる。

「くそ～～俺たちの獲物を横取りか」

大蛇と目が合う、恐ろしい記憶がよみがえる。殺す、頭より体が先に動いた。

獲物を咥えている大蛇は動きが遅い、すばやくジャンプして大蛇の頭に石槍を刺しながら

「スパーク！！」

バリバリバリ

焦げる匂いがする。

それを見たブラザー達が一斉に襲い掛かる。

大蛇を倒した。

「うほほ〜〜

ブラザーの一人が雄たけびをあげる。

「〜〜「うほほ〜〜」」

強い絆ができた。俺は勇者の様に村に招待された。

原住民イメージ通りそのままの住処だった。1mくらいの高さで
古い石垣や木の柵囲つてあり。

100人くらいが住んでそうだ、まだそんなに魔物はいないのだ
わ。

村では宴会が始まっている。村の長に俺が天敵の大蛇を倒した見た
いな事を報告してた。

そしてなぜか若い長と村の権力を争う戦いになつた。

「ああ

「言葉はしゃべれるのか?」

「すまんが大蛇を倒した者が村の長になる決まり、俺と勝負」

「俺は長になる気……」

「村人に言葉は通じない！強い者が長だ手加減なしだ」

戦いが始まつたが、ポコー！一撃で俺は長を沈めた。

俺が長となり宴が始まろうとしてたので味見と言いながら（イメージね）ドラゴンの薬を溶かした水を入れた。

これで狩の傷も治るだろう。知能UPしてくれることを祈った。

村の長を起こし話す。この村で話せるやつは何人だ？

「私と3人女の方と長老夫婦です」

「なるほど、しゃべれないと不自由だな、後で話せるやつらを連れて来てくれ

「女は好きなだけ選んでいい、最低1は連れて寝てくれないとこまる」

何度も断るが、新しい血統が無いと絶滅しそうだとか、村人ほど同じ顔だし、なるほどと思ったが出来そうにない。

俺は村人を見て回る……すげー人類の歴史が分かりやすそうだ。

すげー紀元前の人間発見。心あの村人は紀元前と呼ぼう。犯人

は君だね君がこの村を退化させてたんだね。バシバシ叩く。

「うほ～～うほうほ（分かつたか俺が1番力持ち）」
ムキムキつてしてる。さすがだ。

実はゲラゲラ笑いそつたが、クラオが顔の筋肉を無表情にしてくれてる。

クラオとベニコはその手足を俺の体中に這わしてるらしく、それで神経などコントロールできるらしい。

ああ～～～、いた、原種だ原種……あれは縄文人だな。俺は縄文ガールの前に行つて観察する。

これは筋肉の塊だなおっぱいも筋肉だろ？な、強そうだ。すると縄文ガールが

「うほ、うほ～ん（私、いいわよ）」

「ぶほつぶぶ、ぶほつ（ちがう、全然ちがう）」
つて答えてやつた。ゴブリンより知能低いなこいつら。

無性に縄文ガールの進化が見たくなつたのでドラゴンの薬をがつがつ食べる飯に入れておいた。

適当に歩いてたら、強い魔力を発見したので、そこに行くと熟してるが現代人ぽいのを見つけた。たぶん話せる人だろうあとから、断ろう。顔は美人だが原始人の格好だし頭もぼさぼさなので、興味はない。

「いつだと元長に話すとやつぱり、話せる女性だった。

言葉の話せる人達で集まり、言葉を村人に教えるように説得した。俺はドラゴンの守つてるから長にはなれないと話すが信じてくれない。仕方なしにドラゴンの薬を長老夫婦と女に飲ませた。明日奇跡を起こしたら俺の約束を守れと。皮剥きが心配なので不思議な水とフェロモン魔法をかけた。

その夜、宴も終わつて寝ようとする

「遅くなつてすいません」

と話せる女性が静かに入つてきた。彼女の名はアンナ、綺麗に体を洗い、髪も束ね、化粧をしてあらわれた。目の前で挑発的なポーズを取る。

絶句……

ここまで見かけが変わるとは思わなかつた。たつちました。

手の導かれるまま、体を任せた。

大人だつた……エロＬＶ100くらいの人だつた。

‘ 3 ’

翌日

早朝村人を集める、長老夫婦を呼び顔を見る。ニヤリ、俺は怪しい呪文を唱えながらペロリと皮を剥ぐ。大歓声が起る、すごい盛

り上がりだ。ついでに朝稽古をしようと思ふ。武器を持って、

「よし、朝の訓練をする、これから毎日する様に」

シーン……あ、話せないのだ……

紀元前が突然、「ほおおと叫びだす。

「「「「ほほ、ほほ」」」

ブラザーも声を合わせる。よしやるか、と思つたら、すつゝい勢いで狩に走つていった。

あう……まあいつか、

ふと熱い視線を感じる……やばい、縄文ガールが目を血ぱらせてじつちを見てる、明らかに発情してる。

俺も紀元前を追つてダッシュで追いかけた。

アブね～～あれば危険だ。

どうもグラゴンの薬の効き目は 怪我へ若さ（20歳近く）へ願望なのかな。

サラの場合 軽い病気・ランクアップ2回、多分ランクアップしたかった。

村人	病気・若返り・各種能力アップか。
ゴブリン	怪我・能力UP（知能大・戦闘能力）、
長老夫婦	若返り・？

紀元前

軽い怪我・野生化?

縄文ガール 本能強化大か? 何を望んでいた? やつは何も考えてなさそうだ、危険だな発情してたし。

アンナ もしかして……すごいH口になつてるかも

しかし紀元前は何処に行つたんだろう、きょりきょろしてるとアンナがやってきた。見た目は16歳くらいだ。絶句、制服着せれば女子校正でいける。肌は白く、黒髪、目も黒い。もちろん美女だ、スタイルもすばらしい。俺のスペシャルな水着を「えたいそんな体だつた。

「本当だつたのね。びっくりしたわ」

自分の体を見つめながら話すアンナ。

「私はこれでも有名な魔法使いなの、でもこんなのは初めて、若返るだけでなく魔力も大幅に上がつたわ、シンの為ならなんでもするわ」

「ありがと、所でなんで、こんな所に住んでるの?」

「私は奴隸だつたの、知つてる通り1年前の戦争で逃げ遅れた兵や奴隸の調査役、主はこの森を出る為に仲間を集めるのが私の仕事だつた。今回はこの村の調査だつたの、元長の偵察と勧誘、彼は冒険者の子供だつたけどね」

「なるほど」

「シンが来た時は少し怪しいと思つて警戒してたけど、すぐにバレタから覚悟したのよ」

アンナの話では、俺は正体不明の男だった。見た目もそつだが原住民とも怪しい会話してる、なのに言葉も話せる。魔力を見ても不思議な感じで捕らえきれない。暗殺も考えたが帝国の者ならシンを探しに兵がくるので逃げ場がなくなる。

アンナは、手を触れると相手の情報が分かるスキルがあるらしく、俺の情報を覗く為、夜に会いにいった、シンの行動と情報を見て殺すか考えようと思つたらしい、結果は最高に良かつたは、情報も昨日の夜も……

それに見て、と左手を見せ呪文を唱える 腕に白い文字が浮かぶ

【所有者 シン】

えええ？？

「シンが、私の体を若返らせた時、前の奴隸魔法を書き換えたのよ、信じられないわ」

「そうなのか？」

「えつ知らずにやつたの？」

「知らなかつた」

「じゃあ特別見せてあげるわ、奴隸カードオープン」

アンナの手に不思議な金属板が出てきた。彼女のスキルらしい。

アンナ 人間 女 16 魔女
所有者 シン

制約

1・襲う時は裸になつて自己PPRする事

あちやーーなんだこれーー?

「そんな制約を前言つたでしょ、本氣で」

「たしかに」

「私も見て爆笑だつたわ、殺すかもしれない相手になぜかPPRしてしまつから」

「この制約つて、自由に書き換えるの?」

「そうねー奴隸魔法を使える人なら消したり書いたりできるわ。だから奴隸と持ち主と奴隸魔法を使える人3人で行うからめつたにしないわよ、奴隸について詳しく話すね」

アンナの話では、普通奴隸になつたら、持ち主の命令には逆らえなくなる、それが奴隸魔法。犯罪者か奴隸として売られた人がなる。奴隸魔法は普通の人では使えない、国王や裁判官、奴隸商人など特殊な職業でないと使えない。制約は奴隸の安全を保護するように、主人は衣食住の義務や税金の支払いなど、国によつていろいろ付けられるそうである。破れば奴隸は解放される。

奴隸が主人を殺したり危害をすればその奴隸も主人と同じく死んでしまうらしい。病気や事故で主人が死んだ場い1~2年後奴隸も不時の病気になり死ぬらしい。(サラ達がそう)主人が貴族などの

場合すぐ死ねば死んだことが分かるから時間がかかるらしいその間に後継者が奴隸を引き継ぐことになる。

遠くで奴隸を働かせたりする時、まじめに働かせる為にさもざまな制約がされる。

他にも魔法でなく首輪をつけて奴隸にするもあるらしい。

「なるほど、俺が書き換えたので俺は自由に書きかえられるのか」

「そうよ、その調子じゃまだ分かつてないわね」と言って、奴隸カードの【所有者 シン】をタッチする。

シン	男性	20歳	人間	国王
所有奴隸		265名		
サラ				
ステラ				
ダイアン				

ずらり265名の名前が

えええ国王？？てか全員奴隸だったの？？まさか……ドリゴンの薬つてそうなるのか？でもゴブリンたちはいないから魔物はならぬいのか。

「やつぱり、知らなかつたのね、くすくす笑つ」

アンナの話では、完全な自給自足の生活と、100名以上の住民と支持90%以上、国を守る戦闘力、

があり、国王となる人の器が必要、すべてそろえ国王になると宣言

すればなれるらしい。器、意外は貴族などでも出来るが、器がないらしく王になつた人はいないうらしい。

器なんかないが……もしかしてドラゴン先生の記憶と人格か？最近凶暴になつてゐる気がする。

ぽかんとしてると、さうに【国王】をタッチする。

ハーレム王国	国王	シン	妻	なし
人口	265名	民忠	100%	
文化	LV1	農業	LV2	
商業	LV1	特産	なし	
領地	ハーレム国	LV1	人口	164
	うぼうぼ村	原住民	人口	101
友好国	エリートゴブリン国			

絶句……

「なんでハーレム王国なんだ！！」

「知らないわよ くすくす シンらしいわ、そんな事考えてたでしょ。国名は変えられないわよ」

「ずぼし……しまつた、まさかこんな名前になつてゐなんて。がっくりする俺。」

「ガツカリしないの、国が作れるのはすげことなのよ、国民すべて奴隸だから秘密にすればいいよ」

「なるほど、ばれなかつたらいいのか。」この国の事は秘密でその存在を国外で話してはいけない規則を作る」など数個規則を作る。

確認してくれと頼むとアンナは、【妻】をタッチする

シン王	20歳	妻	なし
側室1	サラ	10歳	
側室2	ステラ	18歳	
側室3	アンナ	16歳	

なんだこれ！？

「あなたが手を出した女よ、まさか10歳とかいるなんて……変体

バチン、びんたされて、言い訳を話す俺、

「そつか、昨日は私も37だつたし、『ごめん』『ごめん』

「しかし、こんな事も出るのか、これでは手が……」
やばい殺氣が……

「そうよ、シンが好意を持つてすれば記憶されるわよ、こんなのは、かなり高い地位しかないけどね、あなたの子供です。つて突然人が来ても分かるようになつてるので、だから女に手をだしたらバレバレだから気を付けるのよ、くすくす しつかり相手してあげるから、女性も浮気したり無理やりされても記録されるから、他の人は手出しあないわ」

独身なのに棺桶に片足つこんでいたのか、しかし他の60名のつてなくてよかつた

「そつか、よろしく頼む」

で奴隸カードのほうは

制約

1・襲う時は裸になつて自己PRする事

1・国の事はすべて秘密、個人情報も含み、国の存在を他人へ漏洩の禁止

1・国のためにまじめに仕事する事

1・毎日訓練して、身を守れるようになる事

「これで大丈夫かな?」

「最初の制約は国民つて付けて方がいいわ、戦争とかになつた時大変でしょ」

「なるほど、そうする」

制約

1・国民を襲う時は裸になつて自己PRする事

1・国の事はすべて秘密、個人情報も含み、国の存在を他人へ漏洩の禁止

1・国のためにまじめに仕事する事

1・毎日訓練して、身を守れるようになる事

ケンカになつたときは面白いだろうな、

「シンだから、話すんだけど聞いてね」

アンナは12歳の時このスキルを手に入れた、このスキル【情報閲覧】はある程度の情報を自由に見れるスキルで、触ればその人の個人情報から国情報まで見れるらしい。15歳になつた時、占い師としてやつていたが、16歳になつた時、貴族にばれて、捕らえられて、奴隸としてそれから生きたらしい。ちなみに奴隸カードは持ち主しか出せないタッチしても変化しない。腕に出る文字は売られた場合は青 犯罪者は赤、自ら望んだ場合白だそうだ。青と赤は隠す事が出来ないが、白は持ち主が決めるらしい普通は出ない。

アンナに触れると情報がバレルと恐れて、だれも近寄る人もなく、主人に夜は散々しこまれたらしい、牢で生かされ外に出る時は、触ると呪われる呪文をかけられた。スパイなど拷問してる部屋で相手の情報を見て話す。それが彼女の仕事だつたらしい。

私は16歳に戻りたかったの囚われる前の姿に何度も牢で祈つたは、力もほしかったこんなスキルでなく戦える魔法が、シンのおかげで、その夢がかなつたのよ。

1年前の戦争の時連れてこられ、今、その貴族は隣の村をのつとつて暮らしてるので、彼らは偶然見つけたムラムラ草を今育てて、その実を収穫してるわ、もうすぐ帝国に帰るはずなの、それまでになんとしても復讐したいのよ、シン手を貸して。

「そつか、そいつ殺すのか？」

「もちろん、捕まえて、ピーーしてピーー切つて埋めてやるわ

ガクガク、ブルブル、アンナも危険だ。

「アンナ、復讐は禁止する、そいつを殺す事もだ。それよりそのムラムラの実ってなんなんだ？」

「何でだめなの、あれは人でないのよ、奴隸も200人はいるは、あいつは人を信じないの回りは全て奴隸なのよ、ガチガチ制約されて皆、生きてるのがつらいのよ」

「じゃ～やつぱだめだ。ま～作戦考えるから、安心しろ、それよりそのムラムラ……」

「作戦かあ、はあ～～。ムラムラ草の実は食べたら ムラムラしてくれるのよ、す～ぐ～Hな気分になつて……何言わせとんじやゴラフ～～」

「言葉が怖い……」

「つま～～樂しそう、食べたことあるのか？」

「無理やり食べさせられたの……そしたら我慢できなくなつて……ゴラア～」

「一人で食べて楽しもつ、うんづん」

「一人で食べてサルになりなさい」

……ショボーン、といひで

「その貴族つてこの村からビのへりこなれてるへ。」

「歩いて半日かな？」

「なるほど、仲間は何人いるの？」

「全員で10名です」

「じゃ～そろそろ、来る頃だな」

「ええ? なんで」

「アンナのスキル貴重なんだろ、どうなったか確かめにくるよ。そいつ、多分毎日奴隸カード見てそうだから、おかしいって気づいて兵送つてくるに違いない」

「それは、ありうるわ」

周りを眺めてるといかにもつてやつが2人やってきた。

第8話 村を出て（後書き）

まことに、お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3632z/>

クラゲと俺とドラゴン先生

2011年12月20日18時46分発行